特 116
198

生花清流指南

四條流一蕭編

始

特116
178

所緣亩一嘯編

生花諸流指南

特116
198

序

總じて心をなぐさむるは、山野の風趣を眺むるに如くはなからむ。いとまあるときは、生花をたしむこそよけれ。おのれとしごろこれを嗜みて、さ〴〵の挿けかたを學び、居ながら心をなぐさむることの、いともいみじきことをさとり、何はもおきて心をこめしに、諸流いづれも流ごとに雅趣あり。さるゆゑこの書、諸流を知るには、また無き書とおもへるまゝ、かくは名づけしことにこそあれ。世の志ある人たちは、ひとりまなびに

大正10年3月27日
交内

用ゐたまはゞ　こよなきものとおもふになむ。

大正三といふとし

秋のはじめ

編者しるす

目次

○生花用草木養ひ方……一
○草木剪取の定則……四
○水揚の仕方花毎の剪取方及び用器用具の心得……四
○草木の撓め樣……二八
○花器に用ゐる水の心得……二九
○生花天地人三才の事……三〇
○花の長けの定則……三四
○眞行草花の挿け方……三五
○花盆及び道具類……三九
○生花全體の圖解……四三
○本勝手、逆勝手……五八
○三體九形に分る圖解……五八
○四季草木の傳……七〇
○生花、死花、殘花……七六
○復り花……七七
○祈儀に忌む花の大概……七八
○神佛に供する花……七八
○毒草、毒木……七九
○花器……七九
○花器の用捨及び取扱ひ樣……八九
○花器と薄板との取合せ方……九〇
○花器の見立……九一
○花器の水量、花配り入れ及び增水……九一

○花留……九四
○強弱の枝……九六
○蔓物の強弱……九七
○草木挿方の禁忌……九八
○生花に嫌ふ姿の圖解……一〇七
○一花一葉……一〇九
○生花に八ッの嫌ある事……一〇九
○生花用捨の事十五箇條……一一〇
○流しの枝の使ひ方……一一三
○四季會釋の差別……一一八
○諸流挿方圖式……一二二
錆竹一重いけ紅梅……一二二
南京染付挿薄紅梅水仙……一二二
一重橋杭挿　柳、山茶花……一二三
釣舟いけ　松竹梅……一二三
茶牡丹、置花……一二三
金雀、山茶花、掛花……一二四
連翹、置花……一二四
三聖柳、置花……一二五
白桃、置花……一二五
彼岸櫻、椿、置花……一二六
櫻の枝こしらへ方……一二六
花菖蒲、置花……一二九
燕子花、置花二瓶……一二九
燕子花の挿方及び葉拵方……一四一
燕子花一輪挿……一四三

燕子花五枚組……一四三
九枚、花二輪……一四四
十三枚、花三輪……一四五
十五枚、花二輪……一四五
燕子花十一枚挿方……一四六
燕子花大小株分……一四七
劒葉……一四七
芍藥、掛花……一四八
爲朝百合　廣口物置花……一四八
美人草、置花……一四九
夏黃梅、姫百合、置花……一五〇
檀特蕉、置花……一五一
釣瓶いけ河骨……一五二
蔓梅嫌中葉根〆掛花……一五三
赤大菜、掛花……一五四
赤抱大菊、置花……一五四
山茶花、置花……一五五
水仙、掛花……一五五
水仙葉組の仕樣……一五六
水仙二本組上……一五九
水仙葉組恰好……一六〇
馬蘭七枚組挿方……一六一
馬蘭三枚挿、置花、掛花……一六二
馬蘭七枚葉組……一六三
馬蘭九枚葉組……一六四
馬蘭十一枚葉組……一六四

萬年青七枚組……一六五
萬年青七五三組上……一六六
蘭の挿方……一六七
玉簪の挿方……一六九
玉簪挿方順序……一七〇
蓮の挿方……一七一
蓮等の五種の挿方……一七一
芭蕉、置花……一七三
南天燭、馬蘭、置花……一七四
松、白菊、置花……一七五
子持筒挿金絲桃、長春……一七六
朝顔、掛花……一七七
梅、置花……一七七
霧島つゝじ、置花……一七八
檜扇、掛花……一七八
しだれ桃、金錢花、掛花……一七九
紺菊、置花……一七九
山茶花、錦木、小菊、置花……一八〇
朽木船いけ剪春花……一八一
狗子柳、棗吾、置花……一八一
屋形船挿木蘭……一八二
繫舟いけ美人草、麥……一八二
出船、舵花いけ……一八三
泊船、蔓もどき、小菊……一八三
置船いけ菊……一八四
白銅の入船いけ……一八五

○遠州流挿方圖式……一八六
福壽草、置花……一八七
白梅、掛花……一八七
燕子花二十七株挿置花……一八八
松、掛花……一八九
水蓼、置花……一九〇
白梅、置花……一九一
朝顔、掛花……一九二
馬耳蘭、置花……一九三
夏菊賴政、置花……一九四
燕子花七株挿、置花……一九五
蔓梅、石竹、置花……一九六
燕子花村雲、置花……一九七
女郎花、置花……一九八
山茶花、萬年青、置花……一九九
白梅、置花……二〇〇
紫藤、燕子花、置花……二〇一
萬年青、置花……二〇二
茶の花、置花……二〇二
狗子柳、置花……二〇三
夏菊富士の雪、置花……二〇四
秋の七種、置花……二〇五
柳、燕子花、置花……二〇六
白梅、置花……二〇七
紫陽花、置花……二〇八
白萩、置花……二〇九

秋菊、掛花……二一〇
石蕗花、置花……二一一
狗子柳、置花……二一二
彼岸櫻、置花……二一三
竹、朝顔、燕子花、置花……二一四
柳、冬燕子花、置花……二一五
雪中花、置花……二一六
芍藥、置花……二一七
馬耳蘭、置花……二一八
狗子柳、置花……二一九
釣瓶挿秋菊、掛花……二二〇
釣瓶いけ燕子花、置花……二二〇
燕子花九株、置花……二二一
燕子花七株、置花……二二二
夏小菊、置花……二二三
著萩、置花……二二四
楓、置花……二二五
木賊、置花……二二六
圓柏、置花……二二七
南天樹、置花……二二八
白梅、置花……二二九
櫻、置花……二三〇
椿、置花……二三一
松竹梅、置花……二三二
牡丹、置花……二三三
著莪、置花……二三四

櫻、置花……二三五
白百合、置花……二三六
木柳、置花……二三七
櫻、置花……二三八
柳、置花……二三九
秋海棠、置花……二三九
白梅、置花……二四〇
木柳、置花……二四一
松、燕子花、置花……二四二
松竹梅、置花……二四三
山城玉川挿方……二四四
攝津玉川挿方……二四五
武藏玉川挿方……二四六
近江玉川挿方……二四七
陸奥玉川挿方……二四八
紀伊玉川挿方……二四九
○池之坊流生花の體……二五〇
○池之坊流生花の花形……二五三
○池之坊流生花挿方の主旨……二五六
○池之坊流にて他流に異なる件々……二五六
○池之坊流に用ゐる花器……二五七
○池之坊流生花の傳花……二六〇
○五ケ條傳花の挿方……二六〇
○七種傳傳花の挿方……二六二
○池之坊流挿方圖式……二六四
梅もどき……二六四

牡丹……二六五
梅に金錢花……二六六
葉蘭……二六七
金雀……二六八
狗子柳……二六九
河骨……二七〇
女郎花……二七一
太閤……二七二
菊……二七三

目次終

生花諸流指南

所緣齋一嘯編

○生花用草木養ひ方

○生花は草木の養ひ方を第一とす。此養ひ方を心得されば、如何ほど勉強して生けるとも、花の精氣衰へ。潤色淡くなるべし。殊に會席の花などにて、時候暑中に方りては、衆くの人の呼氣に蒸され、花衰ふることを免れず。故に之に心を盡さゞるべからず。さて養ひを施すには、眞行草の時候に、季節寒暖の相應するを考へ、其術を行ふべし。此時に遲ひては其功なし。眞の時候と云ふは、舊五月中の夏至より、舊八月中の秋分に終り、行の時候は舊二月中の春分より夏至迄と、又、舊八月中の秋分より、舊十一月中の冬至迄との兩回あり。草の時候は冬至より翌年の春分迄なり。是れ四時の氣の通ふ所にして、春は生じ夏は長じ、秋は收まり、冬は藏るに基く。されば之を晝夜に配すれば、朝は生じ、晝は長じ、暮れ收まり、夜は藏るゝなり。

是れ造化の爲す所にして、四時の季節一切草木に通ずる故に、剪るに時刻あり、養ふに定まる季節あるなり、總じて養ひを施すに二樣あり。寒と暖との二樣にして、寒は水にて暖は火なり此故に凡て手折りたる草木は、一旦津液費ゆる故に精氣淡し。依て養ひを以て自然の精氣を保たしむるなり。これは過不及なきやう注意すべし。

○眞の時候の養ひ方は、先づ花の大小に隨ひて火爐を構へ、（火爐とは、こんろ、七りんの類なり）良き炭を能く火に熾し、銅鍋に深さ一寸二三分ばかり水を盛れ、至極熱湯と爲し、養ひ桶に水を滿へて其傍に置き、剪りたる草木を、莖の本五六分ばかり鍋の中の煮湯に浸し、莖を煮るに隨ひ、草木の全體に温氣めぐり、根本の白くなるまで煮立てたるとき、速に養ひ桶の中の水に移し、動かぬやうに据置くなり。尤も暴き風に當てるなどは惡しゝ、亦、蒸せることをも忌むべし。此樣にして朝養ひたれば、養ふ間凡そ七時間經て取出すなり。又、夕刻に養ひたれば、翌朝取出して用ゐるべし。又、煮る一法は、水一升の中へ、艾一合ばかりと、山椒の實一勺ほど入れて能く煮、八合目に煮詰め、其熱湯の中へ草木の切口を一寸ほど入れ、色白くなるほど篤と煮るべし。但し草木の莖を葉蘭の葉にて包み、花にも葉にも湯氣のかゝらぬやうにすべし。斯樣して能々煮て、冷めぬうちに直に冷水に浸し、眞直に立て置き、風の當らぬやうに七時間ほど措くなり。七時間は陰陽の通ずる時間故なり。

根を燒きて養ふ方法は、花を竹の皮にて包み、濡雜巾にて根本を卷き、手に持ちて燒くなり。養手桶は水入深く、上下あまり太細なきやうに造りたるを用ゐるべし。長手桶は下細過ぎて仆け易し。依て下を細くすべし。

瓶も深くして、口の少し締りたるが可し。口の廣さは花仆け易くて惡しゝ。

○行の時候の養ひ方は、寒暖の偏りなく、和合の季節なるが故に、草木を始め一切の精氣全たしを以て精氣を復すなり。是れ亦草木の大小に應じて火爐を構へ、春分より夏至迄は堅炭を用ゐ秋分より冬至までは消炭を能く火に熾し、徑し凡そ二三寸ばかりに置き、周圍に灰を覆ひ、傍に冷水を養ひ桶に盛れて置き、草木の切口を火に差入れ、炭になるほど燒くべし。斯くすれば火氣めぐりて、全體に温まり出づ。此時速に養ひ桶の水の中に移して養ひ置くなり。其間は七時間なり。此養ひを施すは、舊二、三、四の三ヶ月と、八、九、十の三ヶ月なり。以上の六ヶ月は、時候中和なる故、火にて養ふべし。これは折り又は剪りたる草木を、剪口より一二寸上を葉蘭の葉にて卷き、堅炭を強き火にして、其中へ花の多少を見はからひ、山椒を少し加

滅して火の中へ入れ、草木の剪口を五六分ばかり、火になるほど篤と焼き、焼きたれば直に冷水に入れ、眞直に立て、七時間ばかり生け込み置くべし。

○草の時候の養ひ方は、凍水か、又は至つて冷たき水を擇み、篤と浸して七時間養ふべし。但し汲立の水は宜しからず。又、暖かき所にある水も宜しからず。此養ひ方は舊十一、十二、正の三月なり。其うち性の弱き草木ならば火にて養ふこともあり。されど、性盛んなる草木は陽氣を禁ず。汲置水か又は流れの水ならば最上等なり。隨分冷水に入れて生け込むべし。井水の汲立は陽氣ありて温かなる故、必ず用ゐるべからず。尤も火氣ある邊りは避くべし。

○草木剪取の定則

○草木共に朝か夕かに剪取るべし。總じて日中に剪取れば、枝葉傷みて養ひがたし。依て、日光の强く當らざるときを考へて剪取るべし。

○水揚の仕方、花毎の剪取方及び用器用具の心得

○室咲の梅とて、室の中にて咲かすにあらず、花器に生けて、人工にて季候を待たずに咲かすなり。これは水揚げを兼ぬ。其方法は、花器へ熱湯を盛れ、それへ生けて又木箱に入れ、暖かなる處に一夜置くなり。又、一法は箱に入れずして井戸の水際に釣り置くなり。冬は井戸の中に陽氣集まる故なり。

○梅は枝の切口を火にて焼き焦し、其焦し口へ泥を塗り、さうして生けるなり。又、花器の中へ硫黄を一匁ほど入れ置くも可し。斯くして生ければ花は萎まず、小さき蕾に至るまで盡く開くものなり。

○桃は花器の中へ陽起石の粉を少し入れて生けるなり。斯くすれば、花も葉も勢ひよく、且つ久しく保つものなり。

○芽出し柳は、三月頃には水揚げがたし。殊に若葉は萎凋むものなり。依て逆水とて枝の本より逆さまに水を注けて横に爲し、葉蔦の類にて包み置く可し。斯くすれば暫くして活き戻るものなり。又、一法は、枝に鋸目を入れ、水中に挿し置くも可し。

○柳は、必ず刄物にて剪るべからず。手にて折りたるまゝ、好みに隨ひて本を焼き、曲げて態よく整へ、水盤に冷水を湛へ、枝の末を逆さまに浸し、斯く養ひ置きて生けるなり。若し又、風吹柳などの撓めたる枝は、所々を紙捩にて括り、大盥に水を湛へたる中へ、三四日も浸し養ひ

て生けるなり。

○未央柳は、莖の本を鐵鎚にて打ひしぎ、瓶中に土殷孽の末を少し入れて生けるべし。斯くすれば、花も葉も勢ひよく、久しく保つものなり。

○櫻は、鐵鎚にて打きひしぎ、大枝は鋸目を付けて生溜に入れ置くなり。又、切口を燒きても可し。

○海棠は、花器の中へ薄荷の葉の搾汁を入れて生けるべし。若し薄荷の若葉なきときには、乾葉一兩目ほどを水五合にて煎じ、其煎じ汁を花器へ入れて生けるべし。斯くすれば花は生々して能く保つものなり。又、一法は、薄荷の若葉にて、花の本を包みて生けるも可し。

○李、杏は、いづれも梅と同樣にすべし。同じ効あり。

○山吹は、未央柳と同樣にして可し。又、一法は、切口を打きひしぎ、酢にて本を能く煮、其後水に移して養ひ生けるなり。

○金絲梅、金雀花は、いづれも未央柳同樣にして可し。

○小柳、庭梅、櫻桃、庭櫻、錦帶花、これは何れも枝の本を一二寸ほど火にて強く焙り、冷水に挿すべし。

○卯花は、櫻と同樣にして可し。

○梨、林檎、榠樝は、花器の水に大根の搾汁を和せて生けるべし。但し、枝の本一寸ばかり皮を削るべし。總じて此類は、折口を燒くことを忌む。

○藤は、艾を用ゐると、巴豆を用ゐると、又、酒を用ゐるとあり。艾を用ゐる法は、切口を割りて割目へ艾を挾み、能く燒きて直に水に入れ、七時間ばかり置きて生けるなり。巴豆を用ゐる法は、巴豆をば水にて煎じ出し、それを能く冷し置き、剪取りたる本を其水に挿入れ置きて生けるなり。斯くして尙ほ巴豆水を花器の中へ少し差加へ入るべし。又、酒を用ゐる法は、先づ根本を打きひしぎ、煮たる酒に入れて浸し、酒の氣の脫るほど煮て後、冷水に深く浸し置き、生け了つて後花器の中へも酒を少し注し入るべし。但し、燗酒にするも可し。或は切口の所に酒を塗り、火にて焙り、後に冷水にて生けるも可し。斯すくれば、花は其儘にて損せず、又、一法は、花器に水を盛れずして、酒ばかりにて生けるなり。斯くすれば、勢ひよくして花凋せず。酒は少しも味を變せず、下等の酒も反つて上酒になると云へり。

○萊花、大根花は、剪置けば凋むものなり。されど、逆水して姑く置けば立直るもの故、斯くして生けるなり。

○葉蘭は、朝か夕かに剪取るを可しとす。日中に剪取るは悪し〻。但し、剪取るには、葉を巻きて紙捩にて結び、剪りたれば水に挿し入るべし。斯くすれば至極使ひやすきものなり。暑中には井戸に下げ置くときは、殊の外強くなるものなり。さて生けるには、茶を煎じて冷したるを花器の中に入れ、それへ生けるを可しとす。斯くすれば勢ひよく久しく保つものなり。

○葉蘭の艶を好くする法は、根本を酒に浸け置くも可し。或は葉に酒を注ち、一夜根本を水に入れ、翌日酒を能く拭き取りて生けるも可し。能く艶を出すものなり。

○歐蘭、蕙蘭、山蘭、白及、他偷草は、いづれも茶の煎じ汁にて生けるなり。

○笑靨花、繡毬花、柘榴、小粉團は、枝の本を焼き焦し、黄芪を煎じて冷したる水に、水を和せて生けるなり。

○紫草、荷苞牡丹、葵蕊、變豆莱は、最も淵みやすきもの故に、刻みたる胡椒を、花器の水の中へ入れて生けるべし。

○吉利子、石南花は、花器の水に米泔汁を入れ、それに生けるなり。斯くすれば花久しく保つ。

○王蘭、辛夷、木蘭は、いづれも同じ種類にて、水揚の仕方は同一なり。これは枝を強く焼き、少し割りて、割目に石榴を挾みて生けるべし。又、一法あり。此仕方は、枝を焼かずに只切口を

割り、山椒を三四粒挾み、生溜に入れ置き、水揚げて後に生けるなり。但し、山椒の粒數は、枝の大小に應ずべし。

○牡丹は、鐵又は銅にて剪取ることを忌む。芍藥も同じ。依て眞鍮の剪刀か、小刀かを用ゐて剪るを適當とす。此故に花器も鐵、銅製を禁じ、竹器か土器かを用ゐるべし。水揚の仕方は、折口又は剪口を、莱種油の燈火にて焼き、花器の水へ蜜を加へ、これに生けるなり。斯くすれば久しく凋まず。又、蜜而已に生くれば尚ほよし。花を抜きても蜜の味損せず。

又、一方は、剪取りて直に根を打きひしぎ、根本を煮湯に差入れて煮て、これを生けるなり。或は、根本を焼きて切捨てるもあり、湯にて生けるもあり。冷水にて養ふもあり。

牡丹は、早朝に剪取るときは、花小さく開く。午前八九時頃に剪取れば花大きく開くされども花は大きく開くよりは、小さく開く方が風情ありてよろし。生花には斯く風流の心がけあるべし。

夜の席にての生花は、花を早朝に剪取り、剪取りて直に根を打きひしぎ、根本を煮湯にさし入れて煮て、それを水に入れ、日光の當らぬ所に置き、桶か箱かで覆ひ置くか、或は土藏などに入れ置くも可し。何れにしても午後四五時頃に取出して生けるなり。斯くすれば夜のうちに花

開きてよし。

○芍藥は、剪りて暫く陰干にし、それの根本を燒き、桶に入れ、藁藨を水にて濕らして包むべし斯くすれば其内にて花開き、勢ひ強くなるものなり。斯くして根本の爛腐りたるところあれば必ず剪り捨てゝ生るべし。又、遠方より持來りて葉の萎れたるものならば、水揚して葉に水を注け、一夜露を受けて生けるなり。斯くすれば原の如く勢ひよくなるべし。さて又、枝の本を燒きて冷水にて挿したりとも、夜間は拔き取り、風の當らぬところに横に臥させ、莖にも葉にも水を注ぎ置き、翌る朝は花器に復して生けるなり。斯くすれば數日の間、花は決して損せず

○冬牡丹は、一日一夜の間冷水にて篤と養ふて生けるべし。

○草牡丹は、芍藥と同じ水揚して生けるべし。

○躑躅は、剪口を打きひしぎ、逆水を爲すか、或は割りて逆水をして、それを生溜に挿し入るゝなり。

○杜鵑花は、花器の水に米泔汁を加へて生けるべし。さすれば花久しく保つものなり。

○嫩雞冠木は、枝の本を水に挿れんと思ふほどの長を、鋸目を入れ、汲立の水にて逆水し、生溜に挿け置くなり。さすれば勢ひよくなるべし。若し剪りて日の立ちしものならば、剪口を能く

燒きて切り捨て、木通の末を水に和せ、それに浸け置きて生けるなり。

○燕子花は、莖に小葉あるところの節を竪に少し割り、莖の本を少しづゝ切り捨てゝ生けるなり斯くすれば花久しく保ち、前に開きたる花凋みて、後に一花開くべし。總じて此類の花を生けるには、花器の水中に寒水石を並べ置くを可しとす。又、此類の花は根本を燒くべからず。花には水を注ぐべからず。

○花菖蒲、花あやめ、やぶめうがは、右の燕子花の類ゆゑ、水揚の仕方は燕子花に同じ。

○百合、山丹、英精、蕺瞿、夜合は、切口を燒きて逆水するなり。斯くして砂糖水に生くれば、葉の光澤よくなりて、花も久しく保つべし。

○貝母は、右の百合類の水上法に同じ。

○山梔花は、剪口を少し削り、花器に鹽水を入れて生けるべし。又、水を和せずに鹽ばかりに生けるも可し。斯くすれば、花も葉も殊に勢ひよく、鹽の味も損せぬものなり。

○婆羅花、天蓼は、いづれにても冷水に鹽を少し加へ、それに生けて可し。

○蜀葵は、剪口を強く焦し、花器の底へ石灰を少し入れ、其冷水に生けるなり。

○錦葵、罌粟、虞美人草は、いづれも根本を燒き焦し、花器の水に石灰を加へて生けるなり。又

熱き湯にて生けても可し。

○慈姑は、朝か夕かに剪り取り、細き竹の楊枝にて、根本より葉の際まで上皮を裂き割りて冷水に入れ置き、後に取出して生けるなり。又、一方は、剪りて暫く措き、茎の柔らぎたるとき、根本を一寸ばかり熱湯に浸し、それを切り捨てゝ用ゐるべし。

○慈姑は、水上筒にて薬水を彈き込むも可し。若し井戸の水なきか、又は井戸の水ありても温ませりたるときは、薬水を彈き込みたる上に、冷水に浸して養ひ、それを花器に生けるべし。其薬水は、番茶を濃く煎じて能く冷したるものか、又は粗昆布一種を水一升に入れ、八合に煎じ詰めて冷したるものかなり。但し、此薬水を用ゐるとしても、日陰に生じたる慈姑ならば薬水驗かず、日向に生じて葉に黒みあるものに用ゐるべし。

○水葵は慈姑の水揚に同じ。剪刀草も同様にして可し。此二種は何れも温き湯にて生けるを可しとす。

○澤瀉、浮薔、澤桔梗、燕尾、睡蓮、杏菜、荇菜は、何れも慈姑の水揚法に同じ。

○槿花は、朝に養ふべからず。明日咲く花を擇みて日暮れて剪り、普通は根本を焼き焦し、花器の水に石灰を加へて生けるか、又は熱き湯にて生けるも可し。されども念の入りたる水揚法は根本一寸ばかりを艾にて包み、消炭の火にて焼き、焼きたるところを切り去り、又、艾にて包み、再び焼きて養ひ桶に移して養ひ、翌日取出して用ゐるなり。

○麥門冬、萱草、吉祥草は、同種の草類の水上法にして、花器の水の底に泥一つまみ入れて生けるべし。斯くすれば、花は久しく保つ。

○苧環草は、剪口を少し切り捨て、逆水して後、生溜に挿し入れおきて生けるべし。

○紫羅蘭は、酢にて剪口を煮て、直に水の中に移し、斯くして生けるなり。

○檜扇は、撓めて水揚するなり。手にて撓むるときは折れ易きもの故、花の端より糸を掛け、葉に引き付けて結び止め、能く恰好を付け、一日か或は一夜の間、水に浸け置きて養ひ、さうして生けるなり。斯くすれば思ふまゝに撓きまして、花を損ずることなし。

○紫陽花は、朝剪り取りたれば、根本を湯にさし入れて煮とめ、それを冷水に移し、日さし遠きところに二時間ほど圍ひて生けるべし。又、夕方に剪り取りたれば、冷水に移すまでは前と同じけれど、夜間露を受けて生けるべし。又、一方は、根本を焼きて切り捨て、冷水に養ひて生けるも可し。

○蘇枋花は、木の皮に剪刀傷を付け、切口を二ツ三ツ割り、生溜に挿し入れ、後に生けて可し。

○水蔓青は、根本を燒きて切り捨て、冷水にて養ひて生けるなり。但し水揚り難ければ、左の藥水を用ゐるべし。此草花に限らず、すべて夏の草花の水揚げ難きものには、

水一升、鹽三合、薄荷二十匁、山椒二十匁、酒五合、艾二十匁、蕃椒二十匁、

右の内の薄荷、山椒、艾、蕃椒は能く細末にして、鹽水に酒の和りたる液中に入れて煮やし、それを冷ましたるを毎々用ゐるべし。さすれば水よくあがる。

○水引草は、剪りて露の有るうちに湯に浸け、それを水中に移し、後に生けるなり。

○桐の花は、葉を絞りて根本を打き、ちよつと燒いて逆水して、又冷水中に首際まで挿し入れ置き、水を揚げて後に花器へ生けるなり。

○百日紅、合歡、楝花は、必ず根本を燒くべからず。水を揚げる仕方は二樣あり。其一方は花器の水の中に鍾乳石の末一匁ほど入れて生けるなり。又の一方は、根本を割り、其割目に細辛を挾みて生けるなり。

○夏萩は、竹の皮にて花も葉も共に末まで包み、眞の養ひにするなり。

○宮城野萩は、右の水上法と同じことなれども、行の養ひにするなり。又、湯にて生けるも可し

○夏菊は、生ける前に根本を嚙み割り、暫く熱湯に浸け置くなり。又、剪る時刻は、朝か夕かゞ

可し。剪り取りたれば其儘根を燒き焦し、或は煮湯に入れて煮とめ、冷水に深く挿け込み、葉には霧水を吹きかけ置くべし。水うつとて、あまり度々うてば、葉は蒸せて腐りやすし。凋れかゝりたる葉へは水をそゝぎかけ、薄き藁薦などに包み、冷えたる所に二時間ばかり臥させ、夜間とても風强きときは臥させ置くべし。斯くすれば葉は勢ひよくなるものなり。それを根本を煮とめて生けるべし。總じて菊は、葉より水を揚ぐるものなれば、其心得にて養ひ、厚き藁薦に包み置くべからず、若し厚き藁薦にて包み置くときは、葉は蒸せて腐るものなり。夏菊は葉の養ひを第一にするものにて、花は少し衰ふるとも、葉の勢ひよくば客席にも挿れ得べし。されば葉を主として養ひに注意し、日光の射し入る所、火氣ある所、煙の籠る所などに置くべからず。

○檀特蕉は、沙參の煎じ汁を冷まして花器の水に加へ、或は沙參の末を花器の水中に加へて生けるも可し。但し、夏は眞の養ひにし、秋は行の養ひにすべし。

○玉簪は、檀特蕉の水揚法に同じ。美人蕉も同樣なり。

○千日紅、剪春羅は、いづれも節を竪に少し割りて生けるべし、然なくば水揚らずして凋み易し

○石龍芻は、剪りて其高さの三分一を除き、一本づゝ根本より指にて柔らかにひしぎ、程々に束

ね、細く裂きたる木綿布にて、根本より末まで卷き、好み通りに撓め、大鹽に冷水を湛へ、總體を浸し、一夜の間養ふて生けなりる。

○蓮は、先づ葉を能く見立つべし。至つて古き葉、又は卷葉の開れたるばかりの新葉は、生けて保ちがたし。又、剪り取りて一時間も經ちたるもの、殊に遠方より持ち來りたるものは養ひがたし。剪り取りて直なるものを、根本を熱湯にさし入れ、篤と煮るべし。但し、煮るには、花にも葉にも火氣、湯氣のかゝらぬやうに取扱ふべし。煮たれば冷水に入れ置き、根本の煮くだれたるところは切り捨て、豫て胡椒の粉を水に浸し置き、此水を根の切口より強く注ぎ込むなり。尤も花莖も卷葉の莖も共に注ぎ込むなり。此取扱ひは必ず水中にてすべし。手の温みなどにて萎るゝことあり。剪口は暫くも水を放すべからず。右の養ひにて三四日間は保つものなりさて水揚げの仕方は種々あり。

一法は、花を逆さまにして剪口に泥を塗り、其穴を塞ぎ、剪口を花器の底に着け、挿して後に水を盛れ、鐵漿水を少し注し、これに生けるなり。

又、一法は、折口の穴へ、枝の木を削りて細くしてさし込み生けるなり。斯くすれば能く水を揚げて久しく保つ。又、一法は、隨分熱き湯にて生けるなり。

又、水揚筒にて切口根本より藥水を注ぎ込む仕方あり。これに用ゐる藥水は、種々あり。

一法は、極上等の唐昆布一匁、唐鹿尾菜一合を水にて煎じ、冷して用ゐるなり。

又、一法は、酒一合を水一升に加へ、混じて程よく燗して、水揚筒にて彈き込むなり。

又、一法は、山椒の末と甘草の末とを、上茶と共に煮出し、切口根本より彈き込むなり。

右の法の何れを用ゐても、藥水の戻らぬやうに糸にて根を括るべし。花を保たすが爲めなり。

斬くして度々葉に水を注ぐべし。

○河骨は、花も葉も共に、至つて凋み易きものなれば、能く洽好を見合せ、生けるほどに剪り、本を揃へ、根本一寸ばかりを熱湯に浸し、それを冷水に生けるなり。又、莖下を少し割りて山椒を挾み生けても可し。さて之れも亦水揚筒にて藥水を注ぎ込む法あり。

其一法は、水に石膏を少し加へ、水揚筒にて剪口より勉く注ぎ込むなり。斯くすれば、水が葉裏へ通ることを知る。其度は葉へ七分ばかり通りたるを度として止むるなり。葉際に少々通りたるばかりにては保ちがたし。されど、極暑と秋の末とにて、水揚の仕方異なり。

極暑には上茶を煎じ出し、人肌ぐらゐに冷して彈き入れ、秋の末は石膏を水に和せ、煎じたる茶も混せ、人肌ほどの温度にし、水揚筒にて彈き込むなり。但し茶の煎じ方は、淡き方よろし

擦ければ茶の氣强く して葉の腐ることある故なり。

又、一法は、山椒と上茶とを煎じ詰めたるを、剪口より口移しに吹き込むなり。

此他藥水は、

一種は、水干の唐滑石を水に和せ、白くなるほどに能く搔立てたるもの。

又、一種は、燒明礬一分に水一合を混せたるもの。

又一種は、川芎二匁に水一合を加へ、能く煎じて冷したるもの。

又、一種は、極上の唐昆布一匁、唐鹿尾菜一合を煎じたるもの。

河骨を水揚するに、秘中の秘傳とも稱する法あり。これは河骨を生けんと思ふ前に、兩手の食指と拇指とにて花の莖を交互にひしぎ、又、葉の内の太き藥を、指の腹にて押し平め、花と葉とを一つに寄せ、細き葭などを添へて結へ、井戸の中に吊し置くなり。されど、井戸の水温かなるは宜しからず。

蓮、河骨、慈姑の類は、沼などの水質に生ずるもの故、生けるに池水を用ゐれば可し。總じて水草は軟かにして脆きものなるを、大暑の時候に生けることなれば、水揚せずに生けては、忽ち凋むものなり。

○蓼藍は、蔓の根本を煮湯にさし入れ、それを冷水に移し置き、後に生けるなり。しかし、日向に生じたるは、湯にて生けるを可しとす。或は卽坐に蔓の本を一二寸手にて揉み破りて挿すも可し。是等は宵に剪りて一夜の間井戸の中へ逆さまに吊し置き、翌る朝取出して生けるべし。さすれば勢ひよく保つものなり。宵に剪るとは、前日の午後八九時頃に剪るなり。總じて朝顏は、陰の募る時刻に剪るを可しとする故なり。さて、剪りたれば、翌日開かんとする莟に、今日開きたる花の凋み殼を、端を切りて莟に被せ、借軸に思ふまゝ結び着け、石を付けて水に浸し置き、翌日生けて開かさんと思ふとき、被せた花の凋み殼を取り去り、楊枝に水を着け、少し介錯して開かすなり。されども、花の凋み殼よりは、葱を好きほどに切りて、それを被せ置く方が、花殼よりは勝少て可し。

又、一法あり。朝に剪りたる朝顏を養ふには、滿開の花の中へ、白砂糖と氣の强き酒とを等分に混ぜ、火に掛けて熔かして篤と冷し、簪の耳搔にて、花の旬ひと二三しづく刺し入るべし但し、砂糖や酒は朝顏には敵藥ゆゑ、決して花に觸れるべからず。

午時に花を開かすには、明日開く花を早朝に剪り取り、水揚をして井戸に下げ置き生けるか、又は桶か箱の類に入れ、風の通らぬやうに、伏せ置き、客來りて生けるべし。尤も根は水に挿

し入れ、桶か箱かに入れて蓋をして置くも可し。或は日ざし遠き冷る所に圍ひても可し。

○葉鶏頭は、節々を剪り、剪口の根本を十文字に切割り、煮湯に入れ、水に移して生けるべし。

○鳥頭は、根本を焼ひしぎ、水に移して後に生げるなり。

○萩は、ぬるき湯に根本を挿し入れ置き、其湯の水の如く冷えたるに生けるなり。

又、一法は、生けんと思ふ花器へ、指をさし入れて耐へ得るほどの加減の湯を盛れ、それへ生けるも可し。斯くすれば、湯の冷るに隨ひて、次第に水を揚ぐるものなり。

又、一法は、枝の剪口を二寸ほど鐵鎚にて徐かに打きひしぎ、花器の水の中へ陽起石の碎きたるを少し入れ置き、それに生けるなり。併し、これよりも土般孽の末を水に加ふれば尚ほ好しと云へり。斯くせざれば、花も葉も乍ち凋むものなり。

○桔梗、金沸花、秋牡丹、頼桐、芙蓉は、花器の中へ熱湯を盛れ、花を生けて花器の口を閉づべし。斯くすれば花は一旦弱れども、後に冷水に移せば、勢ひよ〳〵して久しく保つべし。

○木芙蓉は、下枝の所を竹の皮にて能く包み、又、根本を艾にて包み、消炭の火にて行の煮ひにするなり。

又、一法は、米泔汁を煮立て、それに根本を入れ、水に移して後に生けるなり。

○苅萱、芒は、何れも剪りたるまゝにて、消炭の火にて行の養ひにするなり。

○撫子、剪紅紗、紫茉莉は、節を割るなり。斯くすれば能く水を揚ぐ。これは午前八時より正午迄に剪り、直に莖の中程まで水に入れ置けばよし。

○葭は、好きほどに剪り、細き鐵の刺具にて、下の節より末の節まで貫き、左の藥水、一種は、黒き色の新鹿尾菜二合を擂盆に入れ、水一升を入れて能々擂りまぜ、硝子罎に入れて固く封じ置きて用ゐる。

又、一種は、上昆布一匁、上ひじき一合の二種を、水一升の中へ入れ、八合ほどに煮詰め、能く冷して用ゐる。

右の何れにても注ぎ込み、根本を紙にて詰め、冷水に移し、養ひて生けるなり。

○蘆は、葭と同じ水揚げ養ひ方にして可し。されど尚ほ一法あり。朝か夕かに剪り取り、葉の緣を少し剪刀にて切り捨て、泉水又は流れなどに殘らずさし入れ、一時間ほど經ちて取出し生けるなり。

又、根本を湯にて煮とめて生けるも可し。或は水に鹽を少し入れ、剪口より水を注ぎ込み、更に水に入れ養ひて生けるも可し。

○秋海棠は、葉も花も竹の皮にて末まで包み、根本をば艾にて包み、能々行の養ひして生けるか又は湯にて生けるなり。

又、一法は、一夜の間大なる瓶の中に置き、水に深く浸し、斯くして明朝生けるときは葉損せず、且つ花も勢ひよし。若し急ぐときは、莖の節を少し竪に割りて生けるなり。

此花は又物にて剪るべからず。竹箆か又は爪先にて剪るべし。剪りたれば萎びるほど能く焼き冷水に入れ、行の養ひを爲すべし。此養ひを爲すには、竹の楊枝にて節の間を上皮ばかり裂き割り、節々を強く前方まで突き抜き、花葉共に殘らず一時間ほど水中に入れ置きて取り出し、其後は根本ばかり水にさし入れ置き、花も葉も露乾きて後に生けるなり。露あるうちは、露を含める重みにて花亂るゝものなれば、これに注意すべし。

花器は、竹筒に生けるは宜しからず。磁器に生けるを可しとす。總じて夏秋の間は、水熱しやすき故、土器に生けるを宜しとす。

○野菊、玄參、紫苑、龍膽、天麻、沙參、威靈仙は、何れも莖の本を火にて焼き焦して生けるなり。又剪口へ龍骨の末を着けて生けるも可し。

○高麗菊は、午前十時より午後三時まで、他は剪るべからず。此時刻外に剪るときは、花葉ともに凋みて蘇回らず。水揚げの仕方は、少し根本を焼くべし。能く水を揚ぐるものなり。

○菊は、根本を焼けば花を損ずる故、決して焼くべからず。花器の中へ熱湯を盛れ、花を生けて花器の口を閉ぢ、後に冷水へ移すなり。又、遠方より持歸りたるものなれば、挿けて持歸りたる水を、其儘用ゐるは宜しからず。早速に前の剪口を一寸ほど切り捨て、新しき水にて生け込むべし。尤も暫くは、花の首際まで生け込むなり。

總じて菊の類は、根本を割りて川芎を挾みて可し。又、花器の水に川芎の細末を入れて生けるも可し。

○劉寄奴、青蒿、千屈茶、著、黄芩は、何れも莖の本を少しくひしぎて生けてよし。

○葛花、丁子茄、括樓花は、何れも宵に剪りて、一夜井戸の中へ倒さに吊し置き、翌朝取出して生けるべし。或は卽坐に蔓の本を一二寸、手にて揉破りて生けるも可し。

○太蘭は、食指と拇指とにて一本づゝひしぎ、末の方を一尺ほど殘し、それを一固めに寄せ、水を注ぐべし。さすれば分れずして引着くものなり。又、多く生けるときは、便宜に天地人と分け、末は其儘にして、別れ口のところより少し木綿布にて卷きかけ、別々に花ごしらへして二段、五段、或は七段、九段と段取にし、次第に寄せ、卷本は一しよに卷き、末を下にして根

本より篤と水を注け、水氣ある邊りにても、又は深き桶に水を盛れてゞも、それに生け込み、一夜露を受け、翌日生けんと思ふとき、又、根本より水を注け、生けをはりて後に、巻きたる布を取り去るなり。

○三聖柳は、朝露あるうちに剪り、根本を湯に浸け、後ち水へ移して生けるなり。

○楓は、朝か夕かに剪り取り、木通の末を水に浸したる水中に根本を入れ置くなり。又、一法は、木通を煎じて能く冷し、直に根本を入るも可し。斯くすれば煎じ汁は藥氣強くてよし。右は何れも二時間ばかり入れおきて後に生けるなり。尚又、生けたる花器へも藥水の上水を入れ置くべし。

○芭蕉は、剪りたる葉を薄き繼紙にて包み、夏は眞の養ひを爲し、秋は行の養ひをすべし。又、酢を煮立てゝ剪口を浸け、後に水に移すも可し。

○棗吾は、剪口へ艾を一つかみ着け、一本づゝ燒き、其儘水中へ深く入れ、七時間ばかり置き、水上げて後に水に浸して生けるなり。

花あるときは根を揃へ、剪口へ茱種油を着け、火にて燒き、燒くだれたる部を切り捨て、冷水に挿し入れ置き、後に取り出して生けるなり。又、剪り置きて莖の和らぎたるとき、根本を一寸ばかり熱湯に浸し、其根本を切り捨てゝ用ゆるも可し。或は沙參を煎じたる汁にて生けるも可し。又は花器の中へ胡椒を割りて入るゝも可し。

○欵冬、寒菜、青陽菊、一花草は、右の棗吾の水揚法に同じ。

○枇杷、瑞香、迎梅、臘梅、江梅、山礬、八手花は、何れも枝の剪口一寸ほど削りて生けるなり生ける花器の水底へは、硫黄一匁ほど入れおくべし。斯くすれば花器の水凍ること無く、花も能く榮ゆる。

○椿は、鹽水にて生けるなり。又、椿の花は、蕚と花瓣との間に水氣無きゆゑ、花落やすきものなり。依て花の蕚に、鹽水にても鹽にても。少し注し入れ置くべし。これにて潤ひあれば、花は落つること無し。

○山茶花、茶の花、水仙は、何れも椿の水揚法に同じ。

○南天は、曲げる注意が肝要にて、これを曲げるは熱き灰に入れるか、又は火にて温めるかして曲げて其儘冷水に入れて冷すなり。斯樣にすれば撓口を緩めるとも決して戻ること無し。斯くして生けるなり。撓め方は種々あり。それは後の撓め方の部に記すべし。

○葉牡丹は、四季ともに用ゐれども、五月より八月までは水あげ難し。此水あげ方は、葉を絞り

て根本を打き、ちよつと燒きて逆水し、首際まで冷水に挿し入れ置き、水を揚げて後に生けるなり。

○萬年青は、四季各々時候に應じて水揚すべし。春と秋とは三四日間水氣を干し、夏は二三日間冬は四五日間陰干にするなり。其仕方は、假括りして組み上げ、組上ぐるとき一枚毎に爪にて能々しごき、紙捻の如く細く捻り込みて組上げ、花器の前に進み、花配りして生けて後、眞葉より水を注すべし。斯樣にすれば暫くにして能く水を揚ぐ。さて篤と水を揚げて、假括りを取り去るなり。若し急場にて養ふことを得ぬときには、暫く日光に干し、萎びさせて組むべし。又、剪り取りて根本を煮湯にさし入れ、直に取り出し、一時間ばかり捨て置きて生けるも可し

○細竹は、酒を沸らしたる中へ、切口を露あるうちに浸けるなり。斯樣にすれば能く水を揚ぐ。

○大竹は、伐時を正しくすべし。正しきは正午時に伐るなり。時計に依りては狂ひある故、磁石を用ゐて南北を正し、其前方に直なる竹を立て、日影の正北を射す時を以て伐るべし。伐り樣は、節より五六分上にて末を止め、無用の枝、又、枝先等をあらく伐り去り、下の枝を竹の皮にて包み、本の節より一尺七八寸か二尺あまりも下りて伐るべし。斯くして上の伐口には飯を固く詰め、下の伐口より節まで固く艾を詰め込むべし。此仕方は隨分手早くして竹の傷まぬやうにせざるべからず。

夏は眞の養ひにて、普通よりは湯を多くして、下の節の上まで浸し、能く煮て、上に詰めたる飯の周りの色づくころを度として、速かに養ひ桶の水に移すなり。移して置く時間は七時間とす。

春と秋とは行の養ひにて、右の述べたる如く拵へ、燒きて全体に温氣通じたるとき、速かに養ひ桶に移すべし。冬の養ひは格別なり。

正午時に伐る他の伐時は、未明か、又は夕刻にて、此時刻に伐りたれば、鐵の刺具を末の節より貫き、下の節を殘し、藥水を伐口の少し下の方まで注ぎ入れ、末の口をば木綿か、或は紙にて藥水の際まで確と詰め、養ひ桶に移し、七時間養ふなり。用ゐる藥水は、

隨分色の黑き新鹿尾茱二合を擂盆に入れ、水一升を加へて能々擂りまぜ、竹の大小に應じて二升三升、尙ほ數升も製し、硝子壜に入れ、能く封じ置くなり。

又、一種は、上昆布一匁、上鹿尾茱一合を水一升の中へ入れ、八合ほどに煮つめ、能く冷して用ゆ。

又、一種は、川芎を水にて煎じて用ゆ。

總じて竹の類は、下の節より下二寸ほど殘して伐り、此節のところまで燒き、切り捨てゝ冷水

に浸し、葉にも冷水を注ぎ、暫く經ちて用ゐるなり。又、一説には、冬は挿けたる葉へ、篤と砂糖水を吹きかくべし。夏は鰓などの蟲多く付く故、葉を濡らし置き、其上にむら無く擦をふりかけ置くべし。斯樣にすれば葉は萎るゝこと無し。

竹を生ける日までに時日あるときは、去年生のものを伐り、生けんと思ふ葉ばかりを殘し、竹の本を三節ほど燒き込むなり。

○草木の撓め樣

○草木撓め樣の大樣は、草にても木にても、少し捩る心持にて撓めるなり。例へば、菊の類、燕子花等は撓めんと思ふところへ、少し爪にて痕を付けて撓むるなり。木の類は火にて暖め、柔らげて撓めたるまゝ水に浸るなり。少し撓め過る加減にて宜し。但し暖めすして撓めらるゝ木も多し。草類にても手練したる上は、爪痕を付けずして能く撓めらるゝものもあり。撓め試むるには、先づ草木何れにても、不用のところを少し折りて、其の折れ擡梅を試むるなり。さて諸花撓めやうは、無用の枝を切り落し、態を直し置きて撓めるなり。菊などを撓むるときは、拇指の爪の痕付くほどにし、ぞく心持に撓めるべし。葉の付きたるところは節にて折れやすきものなり。依て節の間を撓むべし。

○南天の撓め方は、前に一法を述べ置きたり。尙ほ又一法は、紙を酢に浸し、少し絞りあげて卷き付け、火に架けて強く燒くなり。斯くしても思ふまゝに曲げ得べし。されど強く取扱ふべからず。又、一法にて、結びて使ふものは、鍋に湯を沸し、其湯に大根おろし酢を加へ、能く煮たゝせ、結ばんと思ふ部を其中へさし入れ、強く煮て後心靜に結ぶべし。尤も南天の質よきを見立て、節あるものは用ゐるべからず。

○梅もどきを撓めるは、紙を酢にひたし、撓めんと思ふところへ卷き付け、火に架けて強く燒くべし。斯くして心靜に撓むれば、思ふまゝになるものなり。又、暫く湯氣に翳して撓むるも宜し

○楓又は其他の葉の繁りたるものを撓むるは、濡れたる紙にて卷き、蠟燭の火にて焙り、撓めて其儘水中に、葉も共に深く入るべし。

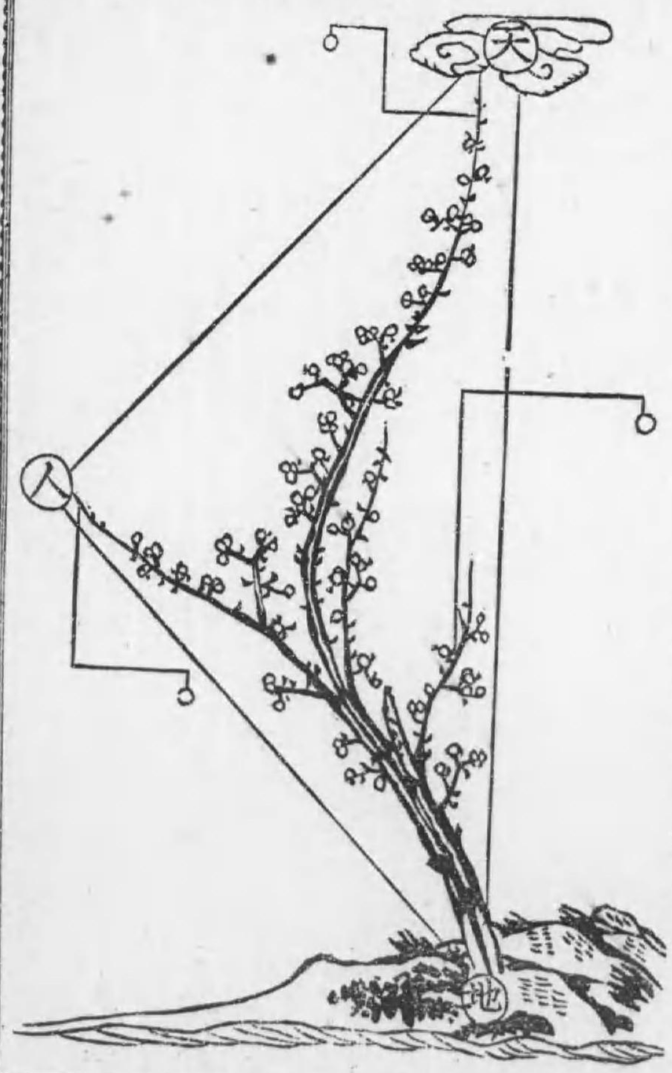
○花器に用ゐる水の心得

○花を生けて久しく置くには、川水を用ゐるを可しとす。又、梅雨の中、其他にても雨水を貯へこれを瓶水に用ゐ、其中へ煤土を一塊燒きて入れ置くも可し、斯くすれば水久しく腐らず。これには紫銅の花器を用ゐるべからず。土器を最上とす。又、寒の水には硫黄を入れ置くべし凍ること無し。尤も貯へ置くうちには毎日水を更へ、花の莖を少しづゝ切り去るべし。

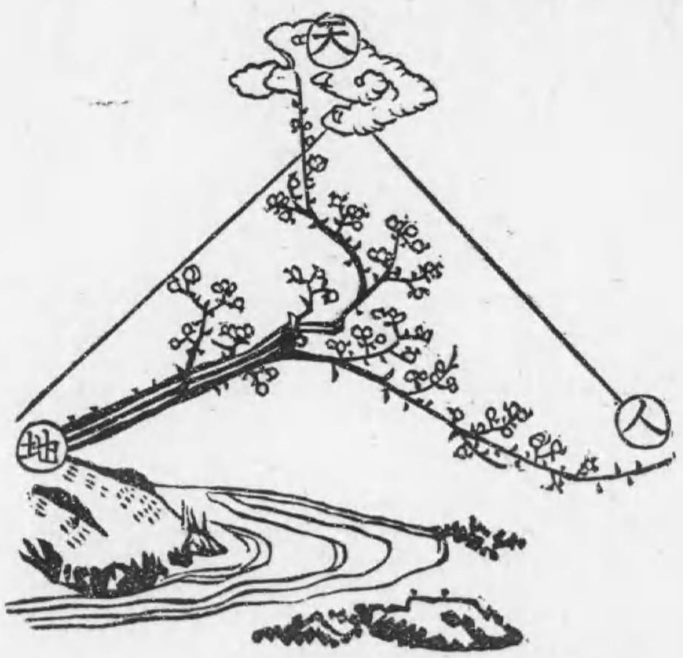
○生花天地人三才の事

○生花を學ぶ初心の人は、先づ三才の形ちを知り、次に眞、行、草、本勝手、逆勝手等を知るべし

生花天地人三才之圖



心と號け立登せて挿る枝を天とし、陽とす。水際の留の枝を地とす。即ち陰なり。陰陽の兩儀相備はつて中央に人の枝あり。故に是を天地人の三才と謂ふ。此三枝を以て三才の體を調ふ。其餘五枝七枝、九段、十一段、十五段に至りても皆三枝に添增す所にして、三の體の外無し。



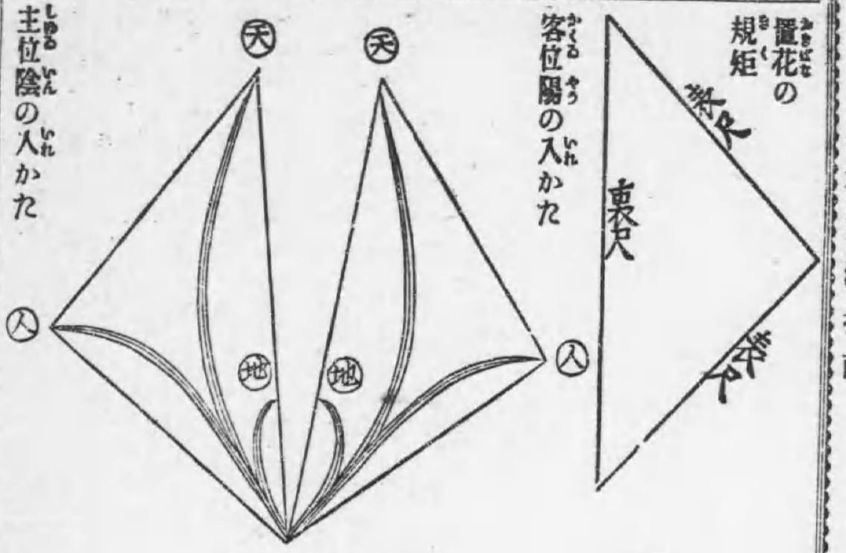
○掛花器の時は此心を以て生るべし

是を俗に横鱗の格と云

○置花は客の生る花掛花は亭主の生る花と心得べし

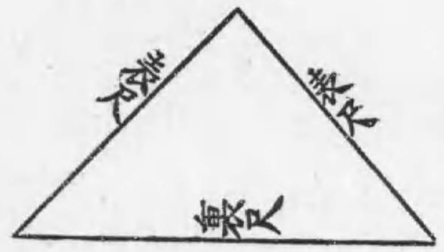
○置花を眞とし掛花を草と心得べし。しかれども置花に眞行草あり掛花にも眞行草あり尙委くは奥に記す。

置花の規矩

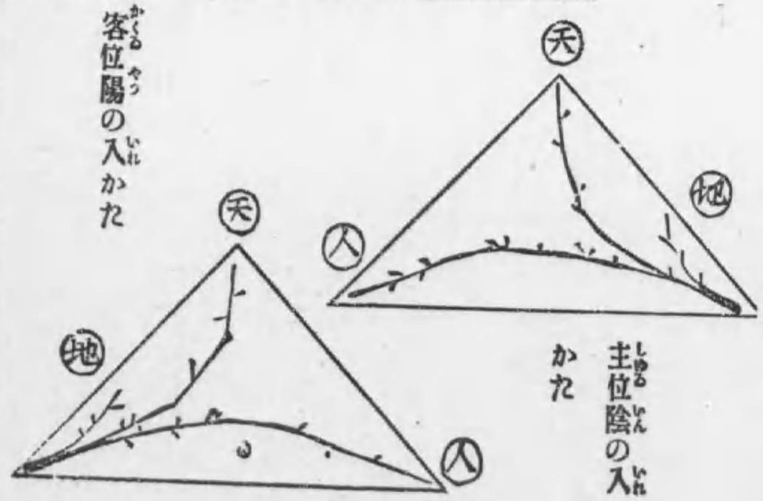


客位陽の入かた

主位陰の入かた



掛花の規矩



客位陽の入かた

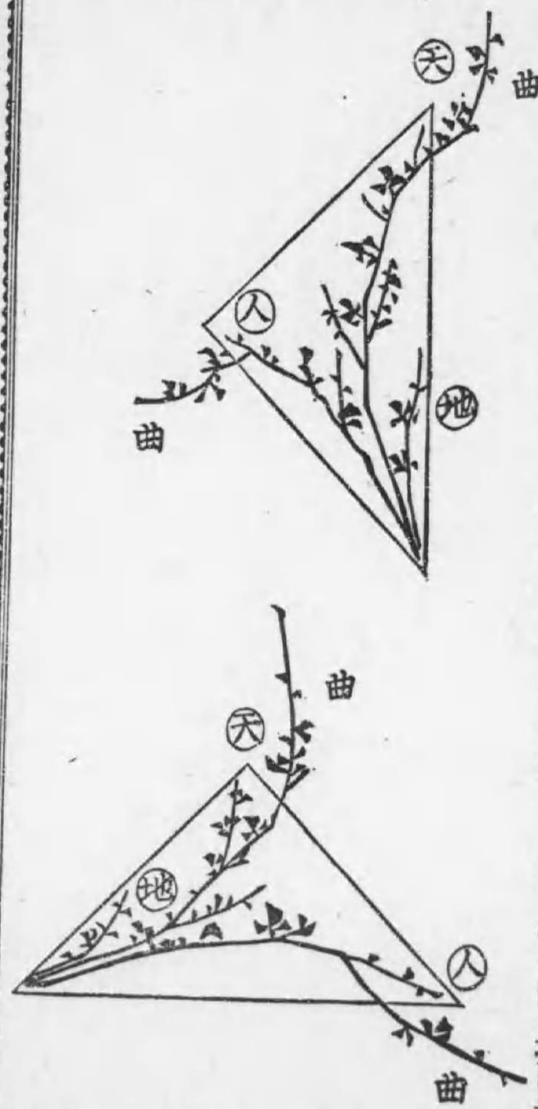
主位陰の入かた

○以上の如き法を用ゐれば、幾瓶挿るゝとも、其曲を以て餘情を表はすこと自在たるべし。花の本數に縦横とも添へて風情を作る。即ち左の如し。

(天)一本、(地)一本、都合五本なり。
(天)三本、(地)二本、都合七本なり。
(天)二本、(人)二本、都合七本なり。
(天)三本、(人)三本、都合九本なり。

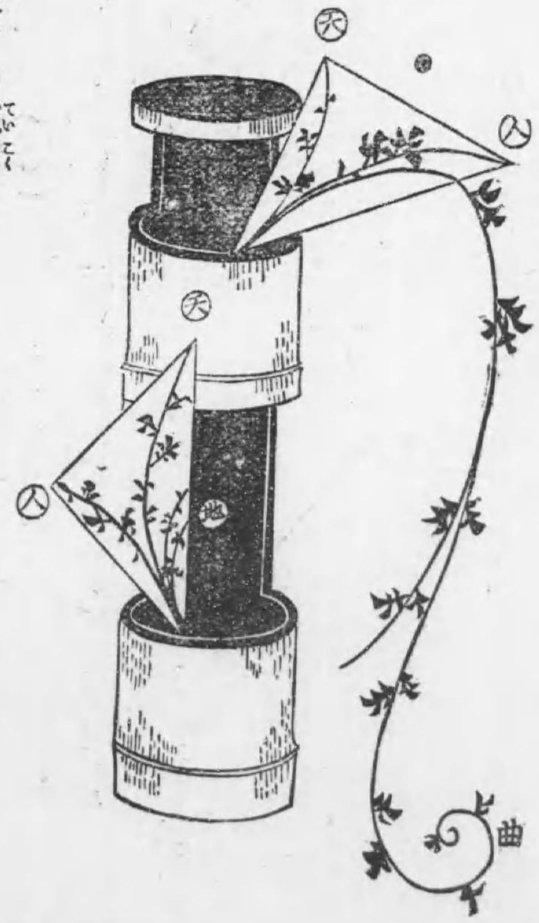
尚ほ變化して數百本を挿るゝとも、全く規矩に背くこと無し。曲の枝の圖を次に示す。

曲の枝の圖



天の枝曲あれば外は法の通りにて人の枝に曲あれば外は法の通りなり。悉く曲を用ゐる事なかるべし

天の枝に曲あれば、他は法の通りなり。人の枝に曲あれば、これも他は法の通りなり。悉く曲を用ゐること無し。



二重切花規矩の圖

下の圖の如く鱗形を規矩とし、表尺は裏尺と爲り、大小長短種々に變化して形を成せども法を失はず、山野水邊、幽谷の景色を調ふるときは、自ら本性にかなふべし。

○花の長けの定則

○凡そ生花の高さの寸法は、花器の長けを二長けと定む。之を通例とす。流儀によりては一長け半といふもあり、尤も花によりて三長けまでは苦しからず。

下の圖の如く、花の長けを、總高さを三長けとして、其三分の二と定むることは、之を人體に表すれば、腰にて折り、膝にて折り、三段になるに同じ。尤も花の寸尺は之を定法とすれども、花の種類によりては寸尺足らず、足らずして低く見えても、それを挿れぬと云ふにはあらざれども、風情の本式にあらず。盥、馬だらひ、其他廣口の挿れ方は、之に准じて器の周圍を取り、二長けの花の寸尺にすると知るべし。若し又此長けに足らざる草木ならば、木物は幹間を取り、草花は株を分ち、水草は魚道(生け株の間を空けること)を分けて二株、三株、五株、七株と分け、二長けの生氣の通ひたるところを花の寸尺とす。挿れ方は、鱗形を縦とし、横とし、それ〳〵の器に隨ふべし。將た鱗の格より延びて、風流を害することなと有りて、己むことを得ざる枝は、法に拘はらず、臨機應變の計らひにて、技倆手練に任すべし。是れを曲と云ふ。是れ則ち、格を離れて格を得る所なり。

○眞行草花の挿け方

生花は天地人の三枝を以て一體と爲すことにて。又、竪鱗、横鱗の格は前に述べたり。これを知りたる後は、眞行草の分ちあることを知らざるべからず。依て左に置花竪鱗の格にて、生け方に眞、行、草あることを示すべし。

眞の花の生け方の圖

眞は行儀よく立つが如くに生けるなり。眞、行、草ともに、智者たる蘇東坡の言にて證す。蘇東坡は、眞は行を生じ、行は草を生ず。眞は立つが如く、行は行くが如く、草は走るが如しと曰ひたり。此意を深く心得べし。形ちは右の圖及び、次の圖にて知るべし。こゝには置花の圖而已にて、掛花鱗の横鱗格の圖を示さず。これにも眞、行、草あり。理は置花鱗の理に同じ。

次には行の花の生け方の圖を示すべし。

行の花の生け方の圖

行の花の生け方は、何にても一種にて、體、用、留と挿けるときは三才の花なり。又、留に別の花をあしらふときは、陰陽の花と心得べし。菊一種にて陰陽の花を挿けるときは、留を用ゐずして、體、用にそへて花を使ふべし。又、小菊にても、あしらひの所へ使ふときは、三才の花なりと心得べし。次には草の花の生け方の圖を示すべし。

草の花の生け方の圖

草の花の生け方は、花一本に、あしらひの花一本使ふときは、是れ則ち陰陽の花なり。體と用とを一體として陽とす。あしらひは陰なり。三才の形ちに生けて、又、あしらひを一種使ふときは、三才を一體として陽と稱へ、あしらひを陰とす。又、一株を體、用と生けて、留の所へあしらひを使ふときは陰陽なり。

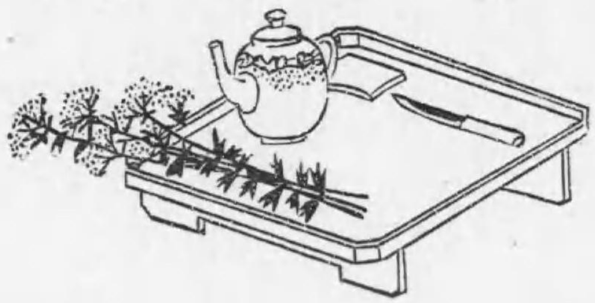
○花盆及び道具類

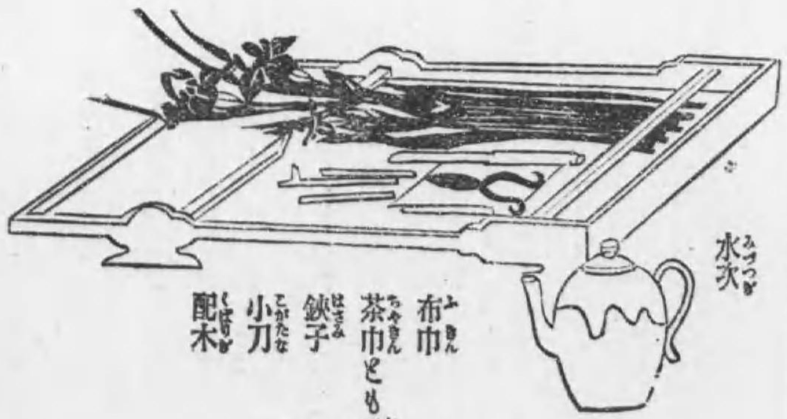
一説には花切小刀布巾水次圖のごとくそへて出すと云ふ。

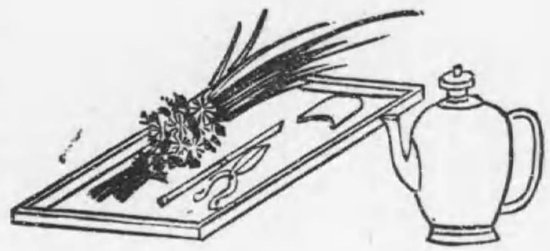
柳などの長きものはわが手で盆にのせ出すべし。

或云右の向に水さし其前に花巾左の方に花をつむ

花木と草と二種の時は水さしの並に水次に草と積也花切は茶巾と花との間へ置べし





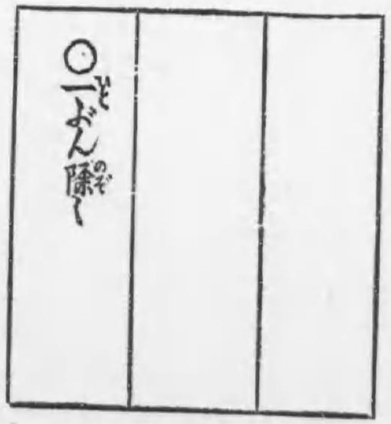


目上の客人には足つきの具にのせて出すべし

下輩には塗盆にてもよし

○右は遠州流の寸法なり

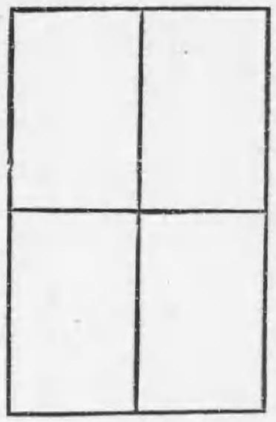
花巾寸法　晒布一幅四方を三わりにして一分を去り其殘二分を用ゆ。



此二ぶんを用ゆ

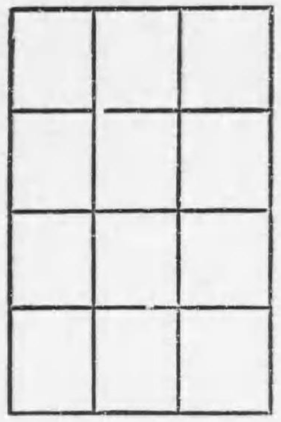
三割

二分の布の圖

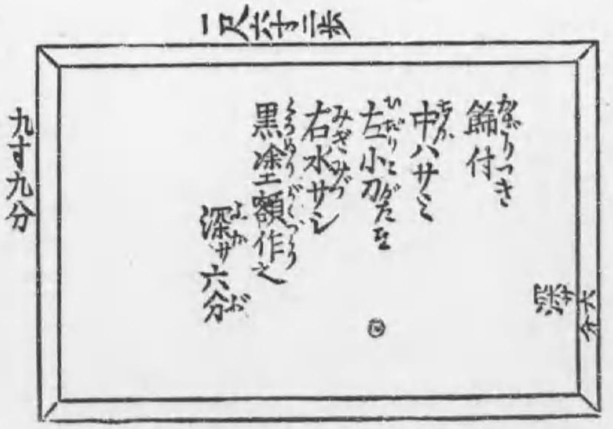


一説に右四ッ折にして置といへり

或云　竪に三ッにをり横に中より折り又二ッに折り以上竪三ッ横四ッにたゝむといふ



花盆寸法　石州流所用



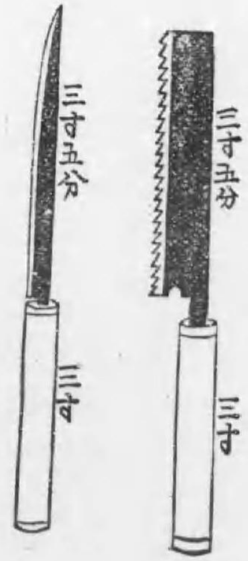
又二尺に三尺三寸も用ゆといふ

又石州流にて用ゆる所の花巾は晒布丸幅を長二尺にたちて用ゆと云ふ

紫銅にて製す

此圖石州流の用具也

渦中次也



水次

○生花全體の圖解

體の枝、又、陽と云ふ

添の枝、又、中と云ふ。五の枝を根〆と云ふ。

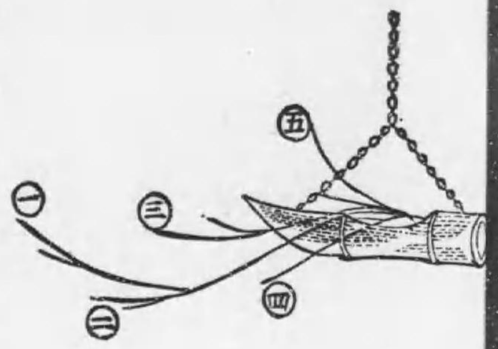
五枝を別に挿すこともあり。

體、添合せて五備の全體を具足したる圖なり。

是れより思ひ〳〵に姿を變化して生けるを實體を云ふ。

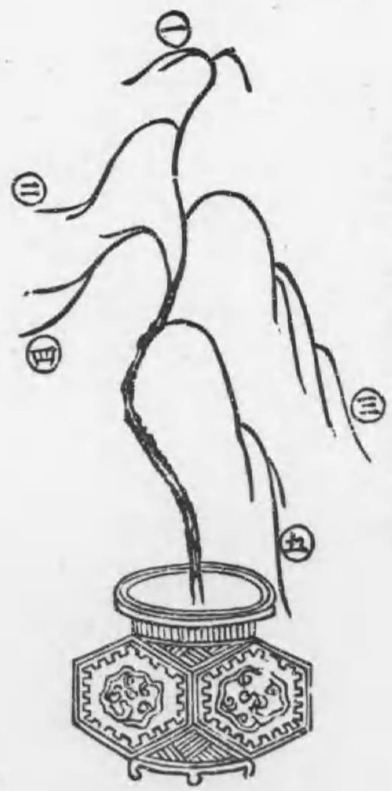
檀特葉蘭すべて大葉もの丶全體

蔓草しなび物全體



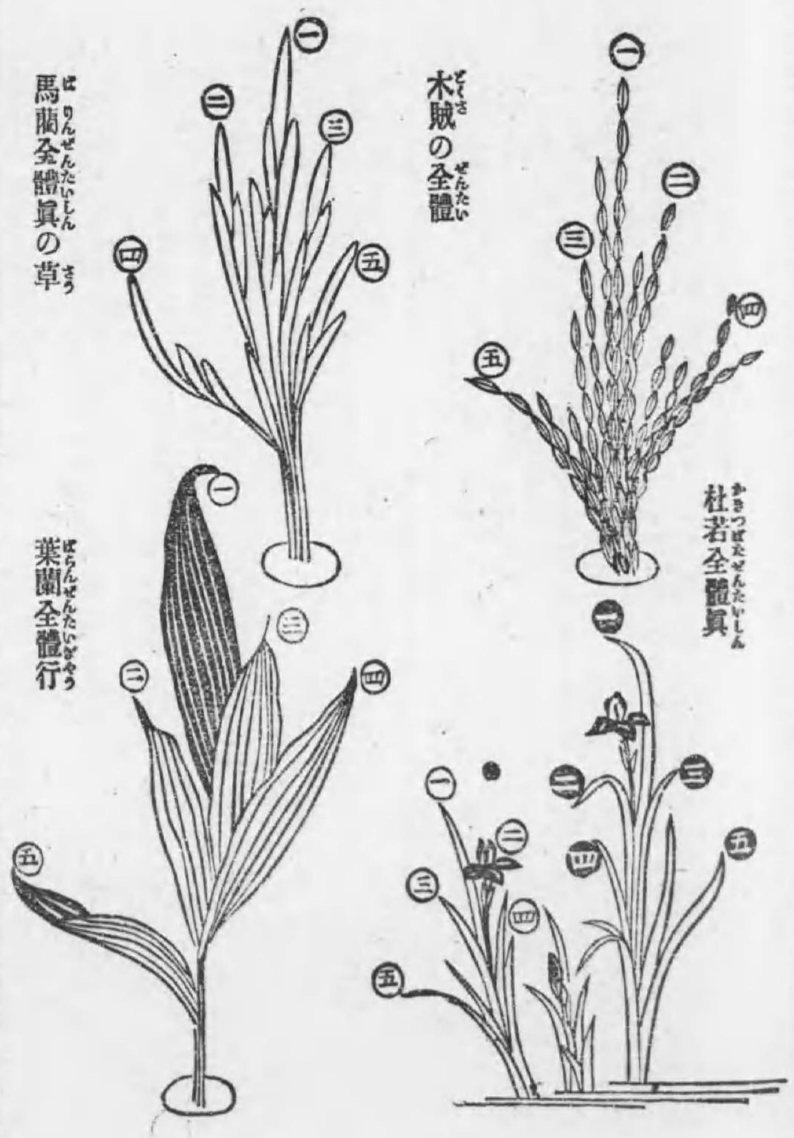
朝顔などの蔓ものは柴か女竹を體にかりて右のふりにて釣花に生る

鈴かけいちご萩などのしなび物つり花の全體



柳のるゐ、たる丶物の置花全體

根ドめ
水草全體
若草の全體
眞の行全體
眞の眞口傳


木賊の全體
杜若全體眞
馬蘭全體眞の草
葉蘭全體行

紅蕉全體行

紫苑全體行

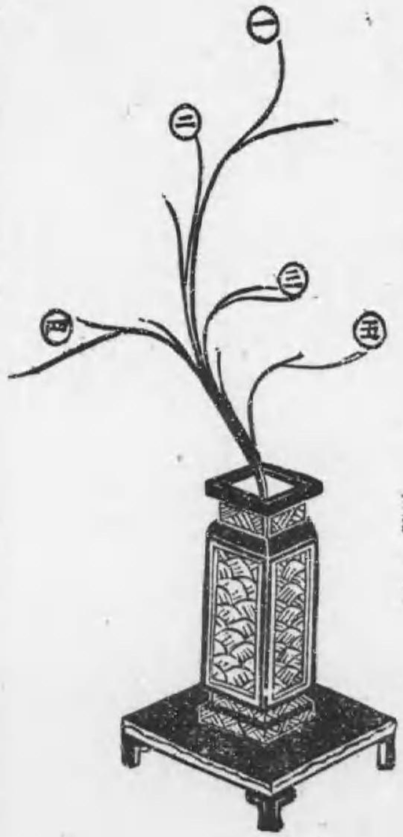
川骨眞の行

水葵全體行

連翹藤の、るゐ全體かけ花

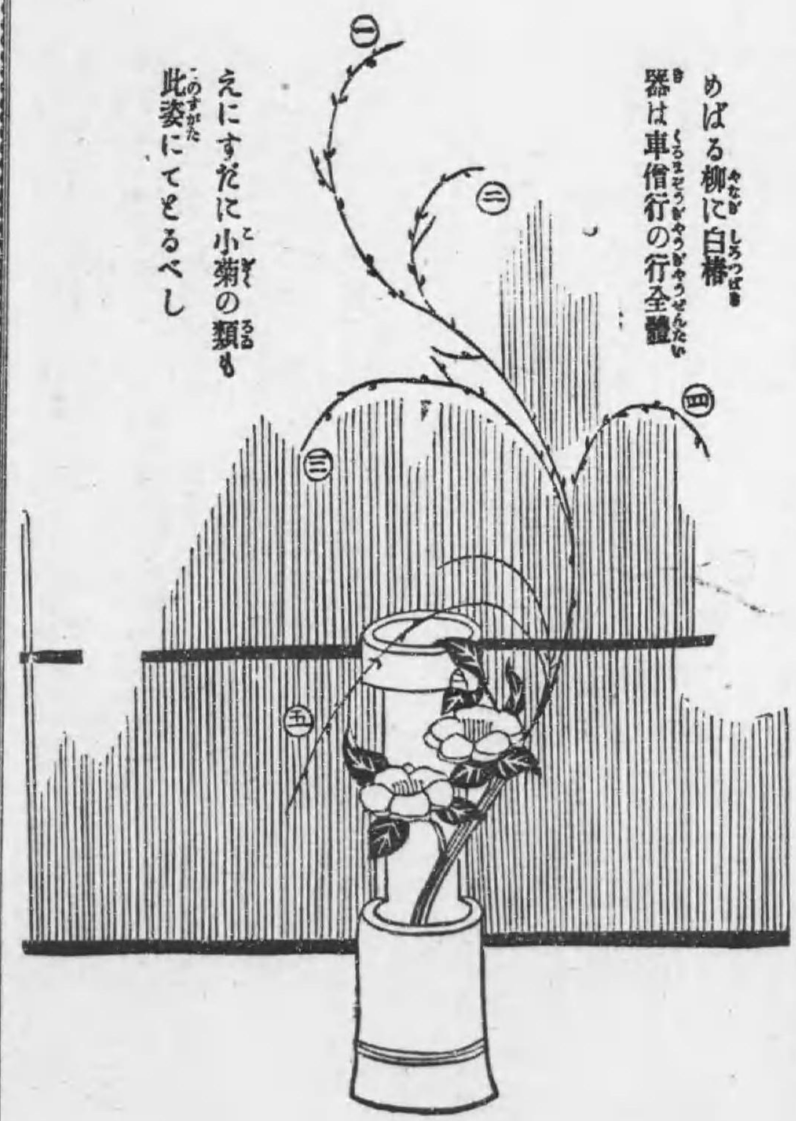
蔓のびもの、全體

鷹瓜山吹擬花にてなびく物の全體

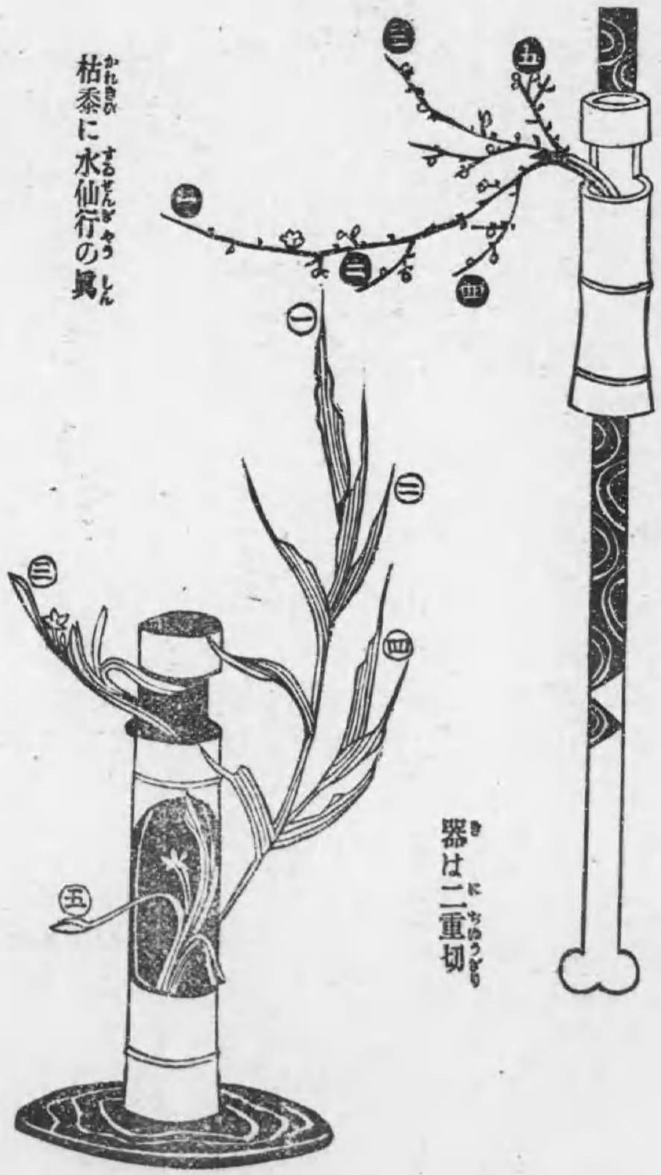


めばる柳に白椿
器は車僧行の行全體

えにすだに小菊の類も
此姿にてとるべし

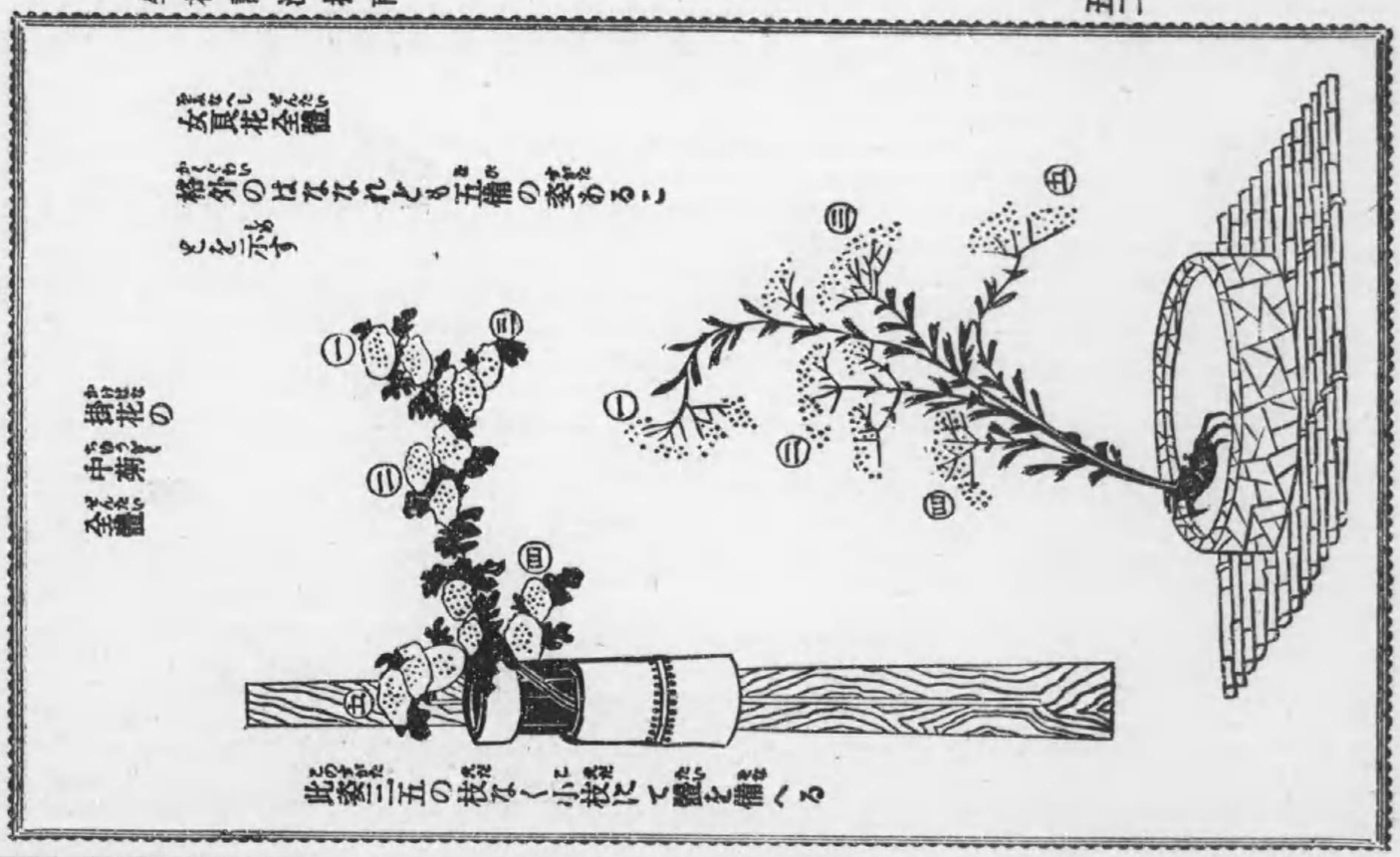


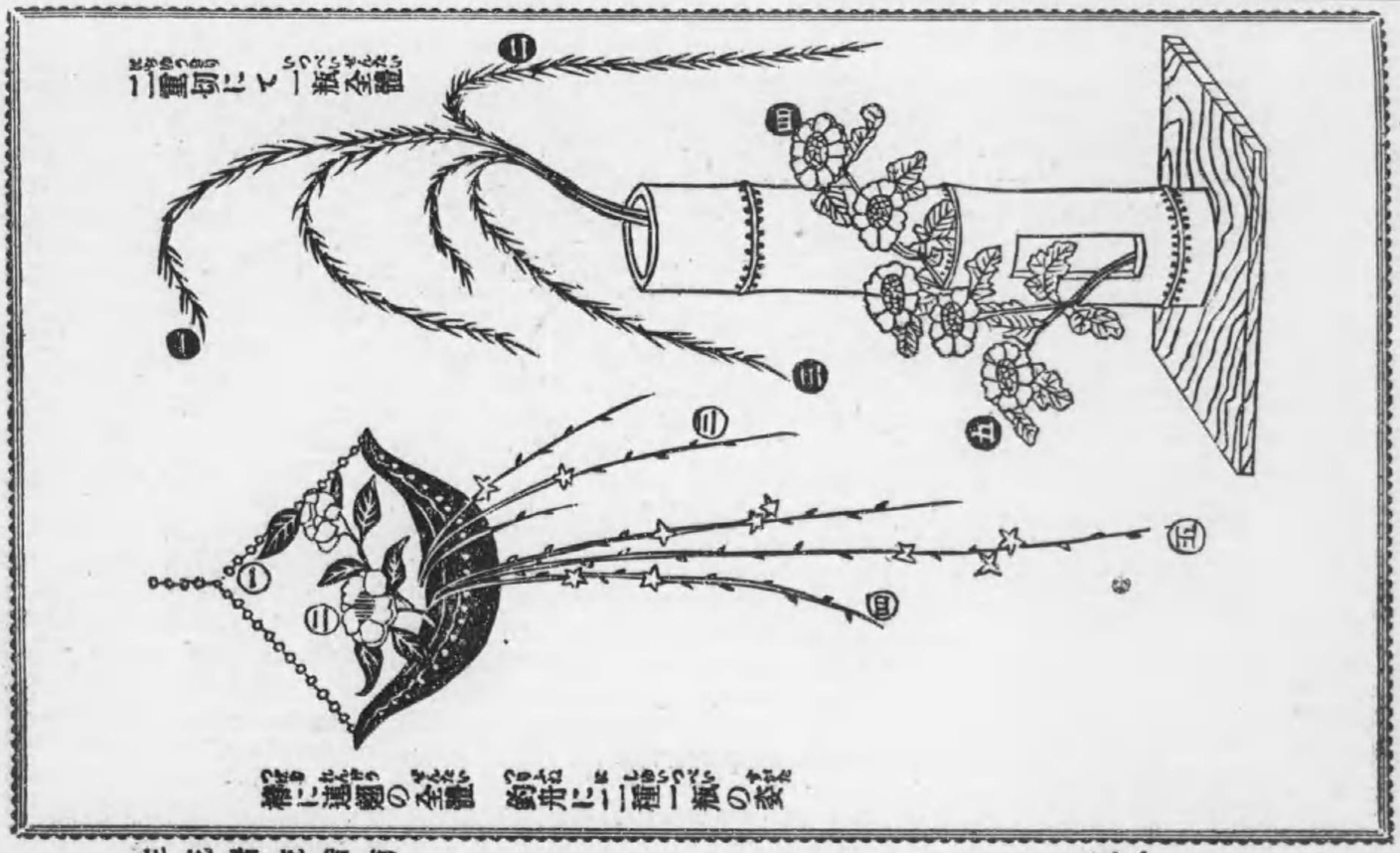
枯黍に水仙行の眞

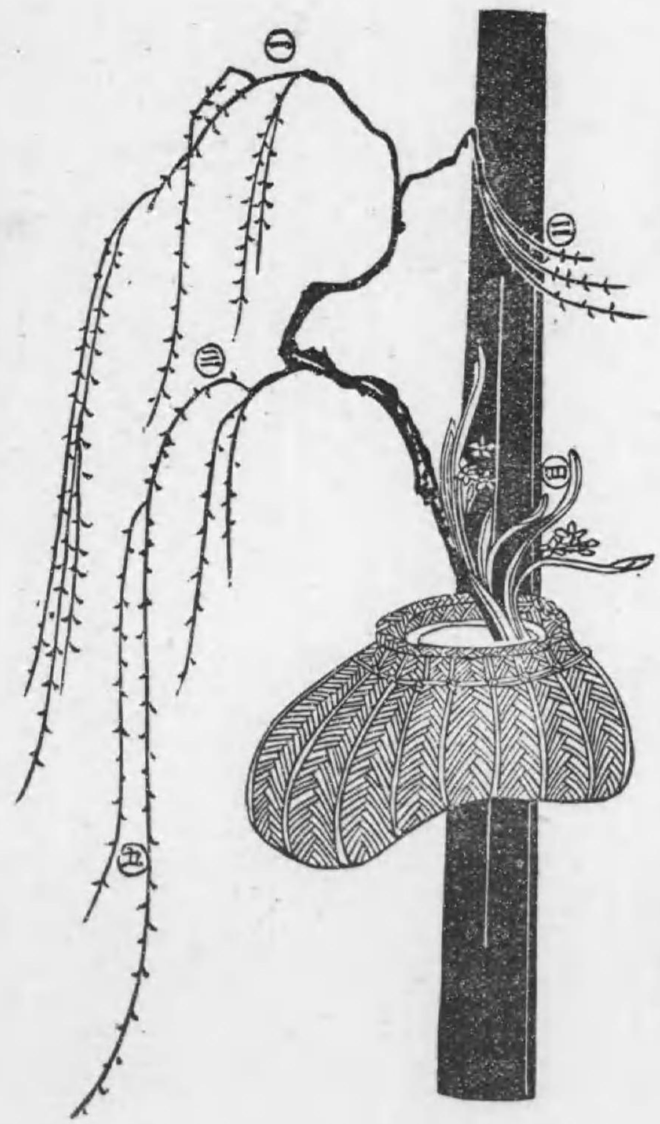


梅草の眞　尺八切

器は二重切


全體の掛花の中菊
太貫花全體
格外のはなれとも五捕の変あることを示す
此変三五の枝なく小枝にて體を捕くる


二重切にて一瓶全體
釣舟に二種一瓶の変
華に遠翠の全體



大懸籠に二種一瓶

一枝に三五の備ある全體　柳に水仙行の眞

蘆に燕子花の全體行の眞

芒に大菊全體草の眞

○本勝手、逆勝手

本勝手と云ふは、花器に對ひて左の方へ生ける形ちの花のことにて、逆勝手は、我れより對ふて右の方へ花の出づるを謂ふ。これを非勝手とも謂ふなり。

本勝手の花の圖　俗に右勝手とも云ふ

逆勝手の花の圖俗に左勝手ともいふ

掛花の本勝手の圖

掛花の逆勝手の圖

○三體九形に分る圖解

○三體とは、主位、客位、中央の三の體を謂ふ。凡そ花、表勝手の方へ向ふたるは主位なり。これは主人の見る意にて、一に主意とも書けり。又、花の表の上坐に向ふを客位と謂ふ。是れ亦客意とも書くなり。次に花の表の正面に向ひたるを中央と謂ふなり。

○凡そ千草萬木其風情異なれども、花容は大概左に圖するが如し。先づ右の枝高く長く、面出づれば左低く短く出し、或は左曲りて離るゝときは右直ぐに添ひ、又、右靡きて下より出れば、左仰ひで上より出し、或は一木にて三枝を兼ね、一草にて三條を備ふ。いづれも其形狀に隨ひ瓶に臨んで辨別すべし。

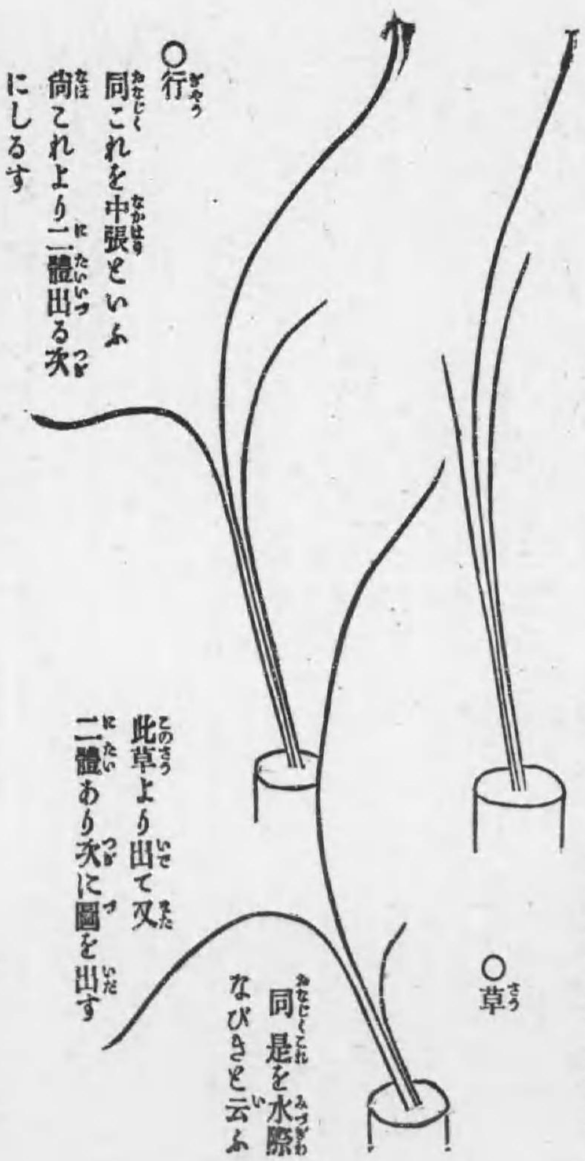
○出生を心得べきこと第一にて、草木ともに山林幽谷、或は野澤の形容を席上にうつし取るを本意とし、花樣の順を失ふべからず。

○木は一瓶を一樹の花樣に表し、草は一瓶を一叢の花樣に表す。故に木は水際より其幹をあらはし、草は一叢のうちより高く伸びたるを心と見立つるなり。尤も花樣は千變萬化すべし。

圖を左に示す。

三體の圖

○眞　青山流には是を附上といふ



○行
同これを中張といふ
尚これより二體出る次にしるす

眞の二體の圖

前に一體を出す

青山流にて是を乘越と云ふ

行の二體の圖

前に一體を圖す都合三體なり

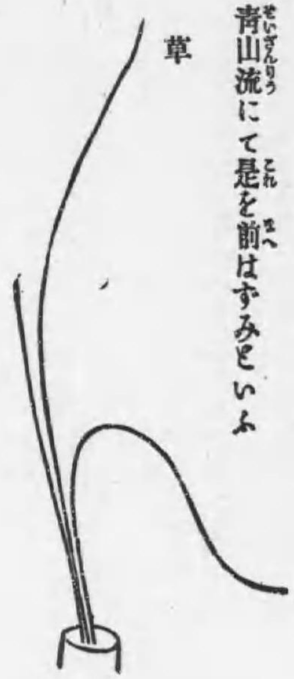
同是を表わけと云ふ

同是を裏わけと云ふ

同右を後屬といふ

草の二體の圖　前に一體を出す合せて三體なり

青山流にて是を前はずみといふ



同これを後はずみといふ

此えだうしろへなびきたる也

右眞行草の三體わかれて又三體づゝの形をあらはし都合九體となる此餘曲花さまゝ有といへども皆九體の本意より出る所にして其方を失はず譬へば人いかやうに酒淫に乘じ舞うたふといへども其本心を失はざれば道に背くことなし心亂るれば五常の道にはづれ終には其身の禍を釀す花又これに同じ

梅二本の圖　凡て二本の外は丁數をいひべし

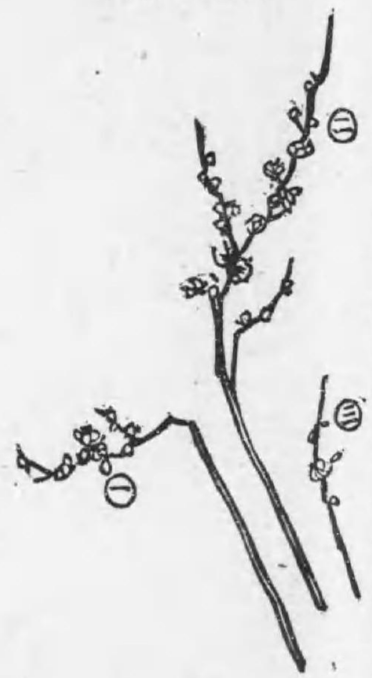
右を三本にて調ふ時は前にしるす前はづみのごとし

これは一本にて天人と兼たる枝也故に二本にて三體とゝのふ也

是は小枝一本也

右の枝二本にて挿る

梅三本



此挿方は通例人の技より挿天の枝より地の枝とさす順也又流義によりて天よりさして人地とさすもあり

留の一枝は奥ふかくみゆるやうに挿こと肝要なりすべて留の一えだを以て一體のしまりをなす也枝は小さしといへども其役は重しと思ふべし

しんのうしろにあり

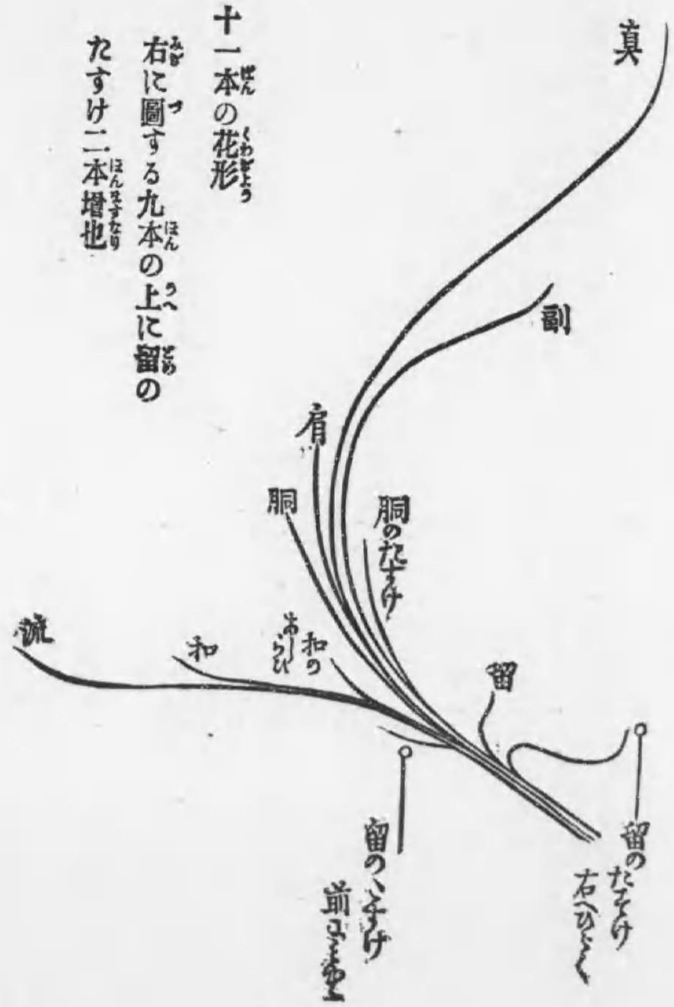
胴のたすけう留しろにみゆる

奥の方にみゆる

真　副　肩　胴　和　流

菊九本の圖

九本の時は右に圖する七本の上に控のあしらひと胴のたすけと二本増なり花形は是にかぎらず増補の次第かくのごとし



十一本の花形

右に圖する九本の上に留のたすけ二本増也

女郎花
十三本の圖
右は前にあらはす
十一本の生かたに流のあしらひと
肩のあしらひと二本增なり

十三本の花形を馬蘭十三枚に直し
本勝手を逆勝手に生かへたる圖
○本勝手とは前にあらはす勝手也
是を右勝手とも右座の花とも本座
の花ともいふ
○逆勝手とは此馬蘭の通の勝手にし
て左勝手とも左座の
花とも逆座の花とも
云左右の生なはし大
てい斯の如し

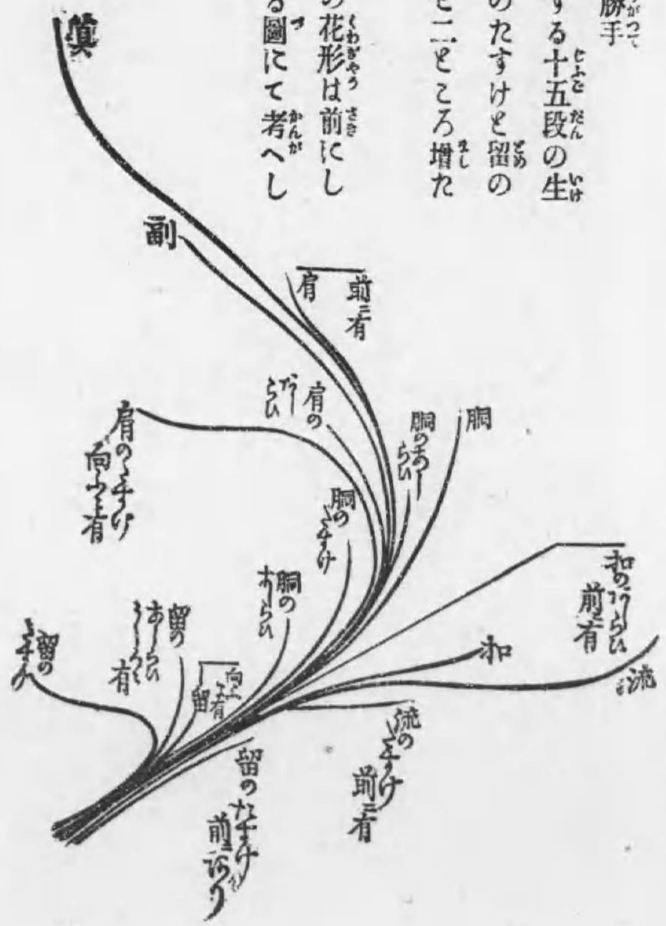
右十三枚に二枚を増ときは胴のたすけと肩のたすけと二本そゆる也都合十五枚となる尤是に限るにはあらざれども大概かくのごとし

十七本左勝手

前に圖する十五段の生方に肩のたすけと留のたすけと二ところ増たる也

又右勝手の花形は前にしるしたる圖にて考へしるべし

事繁ければ別にしらさず



○四季草木の傳

○梅は、紅白、八重、一重あり。小枝多くして撓めにくきもの故、沸湯に翳して撓めるべし。白梅は輕々と閑靜に挿し、紅梅は多く枝賑はしく挿し、古瓶を好む早春には、鶯をも宿すやうに、古歌の意を含みて挿すべし。

○福壽草は、阜下か、或は廣口、砂鉢などの根添によし。

○桃は、巧者ならざれば枝打成りがたし。二種の取合せ等は難し。多くは莱種、著莪などにあしらふ。此花は枝が天へ突き出て銳し、故に優しき根古をして、花の品格を付くべし。

○彼岸櫻は、桃に同じ。但し、花配り肝要なり。尤も一種いれに限る。

○櫻は、制花のうちにて、印可の上ならでは挿れがたし。されども、初心より挿すを許す流儀もあり。これは折りたるまゝにて剪刀を入れずに生けるなり。花落ち散りたらば、薄板の上へ並べ置くも、花を惜む風情ふかし。

○柳は、春には芽柳あり、其他四季ともに眺めあり。水邊を好む意にて、下に池川など有るやうに活かすべし。

○莱種は、梅、又は桃の根〆に用ゐ、一種いれにはせぬものなり。

○連翹は、多く掛花に挿る。置花には好まざれども、橋柱などの大竹花器には、置生も風情あり

○山吹は、陸木にて水邊を好む。柳は高みの木にて水邊に飼ふ、此花は低みの木にて水に映る。依て掛盛、釣船類よし。

○海棠は、一種いれにすべし。花器は金屬製にて、殊に銅の古瓶によし。手練ものなり。

○亥子柳は、又、狗子柳とも云ふ。これは柳の芽なり。紅皮を脫がざるうちは、白椿を根〆とし芽を吹きて毛の付きたるは、赤椿の根〆を用ゆ。尤も椿に限らず、取合せよく添ゆべし。

○笑靨花は、鮟鱇切などの竹器に能くうつる、白笈、百合など花口へ取込み生けたるは面白し。

○金雀は、撓めやすくして自由になる枝なり。されど、あまり撓めすぐれば、獅子の尾の如くなりて惡しゝ。花あるときは一種挿にしてよし。

○白笈は、葉づかひ葉闌、萬年青に類して、少し優かたに生けるべし。鈴かけと取合せてよし。

○百合花は、花の莖强くして生けやすし。姫百合の花は小さくして見込うすし。竹島百合は俯向くが自性なり。注意して生けるべし。

○躑躅は、好みて挿さじきものなり。されど、霧島は紫銅の古器に挿れたるはよし。

○牡丹は、口傳花なり。大かた賑やかに挿す。至つて大輪なるは一輪挿も可し。

○芍藥は、牡丹と同樣なれども、葉どりの透し鮮かに挿すべし。されども元葉を剪ることを禁しむ。

○辛夷は、一種挿に定まる花なり。木蓮も、しでこぶしも同じ。何れも枝打に意を用ゐるべし。

○卯花は、小器の錆竹か、銅器かに挿るべし。隨分花を白く見するやうに器の取合せ肝腎なり。

○十姉妹は、掛花に挿れて自性を表す。弱く見えて強き枝なり。

○燕子花は、葉澤山に挿す。生け態に拘はらず、葉の自性を知りて、それに背かぬやうに挿すべし。

○槿花は、禁花なれども、時宜によりて生けることあり。

○檜扇は、午時までの花なり。體は其まゝ挿れ、添葉は釣合を見定め、取りたる葉を後より添へて生るなり。體、添とも花の莖を引下げ、程よく使ふべし。花屋に賣る南京といふもの宜し。

○夏黄梅は、釣船生にしてうつり好し、二重切の體にも生ける。

○鷹爪は、小枝を鋏むうちに風情出る。瓶に挿さぬうちに枝打して花器に取合すべし。

○夾竹桃は、一重咲はよし。花多きは取すかして用ゆ。

○紫陽花は、花重くして俯向きやすし。依て、花をすかし用ゆ。

○大手鞠花は、形ち並びて猪の目になりやすし。掛花には挿されぬ花なり。置藍によし。

○鐵線花は、蔓物なり。總て蔓物は多く釣花にす。先、中、本と花を配り、葉も准じて利葉を置く。

○金糸梅は、掛花に挿せば眺めあり。

○夏菊は、秋菊と同じ意にて、少し葉づかひの透しあるべし。

○大明菊は、古器の掛花によし。茶室に生ければ閑靜なり。

○木賊は、直立するが自性なり。瓦形などに挿れて、小花をあしらひ用ゆ。一種挿も雅趣あり。上手の挿れ方すべし。

○紫苑は、葉づかひ至つて難し。葉の打合せを一段、二段挿るとも、五段に及べは同じ樣になりて見苦し。

○檀特蕉は、葉組して、留葉は曲あるを低く使ふべし。芭蕉なども同樣なり。

○美人草は、中咲を用ゆ。滿開は散りやすし。祝儀には嫌ふ。

○罌粟花は、これも祝儀には嫌ふ。

○美人蕉は、大概檀特蕉の生け方に同じ。
○萱草は、葉の綴目を解き、高低を付け、右左より葉を花の莖へ、ピッタリと着けて挿すべし。
○河骨は、花に葉を添へて使ふ。大概蓮の花に等し。釣瓶、水盤等によし。水揚げかぬるものなれば、花葉の莖に細き竹を刺し、其の穴へ、茶の末か、或は土器の粉を入れて生けるべし。
○紫羅蘭は、縞葉蘭にあしらひて、能くうつるものなり。
○高麗菊は、木花の根〴〵に用ゐることあり。杏の取合せによし。うつりよきものなり。一種小器の掛花にもよし。
○葉鶏頭は、水を揚げかぬるもの故、暫時の眺めなり。
○八朔梅は、枝ぶりに拘はらず、珍らしきを肝要とす。
○萩は、薄端などによし。秋の物にて淋しき姿を得たる花なり。専ら和歌の意を含むべし。萩も同じ。
○桔梗は、古瓶に芒ほどあしらひてよし。
○澤桔梗は、掛花に挿るものなり。置花のときは他にあしらひ物して根〴〵にすべし。
○女郎花は、花の數少なく、疎らなるが自性にてよし。たよ〳〵と風に靡く意を持つべし。

○白求は、掛、置ともに一種挿なるべし。
○仙翁花は、春羅の類なり。これは内黒の鮟鱇筒に挿れて能くうつるものなり。葉蘭、木賊などのあしらひに用ゆ。
○春羅は、掛花か、釣瓶などに挿るれば相應ならん。此花は手ばなれ早くせざれば、花姿みやすし。
○芒は、類多し。其うちにて十寸穂の芒を尚ぶなり。専ら姿を生ける心得あるべし。
○撫子は、澤山に挿るべし。三段、五段に挿るをよしとす。
○秋海棠は、祝儀等には用ゐず。能く水を揚げて挿すべし。
○笹龍膽は、根〴〵に用ゆ。蔓龍膽は釣船によし。
○殘菊は、花の附け際より莖の曲るものなれば、掛花によし。
○菊は、夏より秋へかけて、百瓶の内六分は菊なり。尤も大中小數種の自性を、能く辨へて挿すべし。大菊を短く切り、小菊を長く高く使ふは、性に違ふと知るべし。
○寒菊は、葉の色焦げて雅趣あり。専ら葉を賞して挿るべし。紅白の寒菊は花を賞すべし。
○冬至梅は、椿などの根〴〵に生ける。目出たき意を得てよし。

○水仙は、葉の拵へに口傳あり。根本の袴といふ白皮を抜き、葉を二枚づゝ重ね、ねぢれたる瓣を直し、又、元の如く袴を着せて姿をつくるべし。

○寒竹は、新葉の出かけたるを用ゆ。流しかけて挿るを嫌ふ。立目に生けて、あしらひにすべし

○紅葉の楓、白膠木、黄櫨、柞、黄楊、地錦、絡石、梅、櫻、柿、銀杏、其他、葉の紅く黄に映りたるものを取扱ふうちにも、楓を専らもみぢと云ふ。これは大きなる花器に挿るべし。深山峰谷などの況を得て挿るなり。

○梅嫌は、葉を悉く取りて、實ばかりにして挿ると、蔓との二種あり。蔓もどきは釣生にしてよし。すべて生花は花葉を用ゆ。實ばかりは用ゐず。されど、色づきたるは捨るに由なし。

○萬年青は、葉づかひ口傳あり。實は葉の裏へ出づるが自性なり。之を考へて挿るべし。

○蘭は、莖を陽はに見せざるがよし。

○生花、死花、殘花

○生花とは、すべて早咲の類の花なり。卽ち早咲にても當り月に正當に開くべき花を謂ふ。これを又當季の花と言へども、春季の花、夏季の花を當季の花と言ふに紛らはしければ、然は言はずに生花と謂ふべし。語を換へて言へは、本月咲くべき花なり。客を選するには正當の花とす

○死花とは、花開く正當の季より一季後れて挿す花を謂ふ。卽ち春に冬咲を挿し、夏に春咲を挿し、秋に夏咲を挿し、冬に秋咲を挿せば其花は死花なり。例へば、水仙又は寒菊は冬の出生の花なるに、是等の花を春に挿し、又、梅櫻は實際一季後れに挿すことは無けれども、季節替りに咲く春の山吹などを、夏季に入りて、挿せば其花死花なり。獨樂には用ゐるも可なれど、客花には用捨あるべし。況てや諸祝儀花には用ゐるべからず。

○殘花とは、二月に正當に咲くべき花を、三月又は四月の頃に挿せば、其花は殘花なり。されば此花は、前月又は前々月の殘り花と知るべし。例へば紅梅は二月に咲くべき花なるを、翌月の三月に挿せば、其花は殘花なるが如し。他は推して知るべし。

○復り花

復り花は一陽來復する十一月冬至の頃に咲く花なり。陽氣を含むを以て用ゆ。珍花なりとも時ならぬ花は挿れざるものなれども、復り花は旅行出發、又は旅行がへりを待ち受くる留主中の席、或は快復を新る病人の所望の花などに用ゆ。されば時ならざるものなれども、花によりて

は祝ひ事に用ゐるも苦しからずといへり。

○祝儀に忌む花の大概

○祝儀に用ゐる花は、祝ひて目出たきものを生けることゆゑ、忌はしき花を用ゐるべからず。されば名の悪しき花は勿論、死花、殘花等を生けることを避けるべし。避くべき花は左の諸花なり

接骨木、木瓜、躑躅、瑞香花、連翹、薔薇、三股の花、藤の花、山吹、菜花、梨の花、李の花、銀杏花、蘇枋花、馬酔木花、蔦、木連花、辛夷、紫羅傘、馬揀草、金錢花、石南花、柘榴、剪春花、仙翁花、かはら撫子、罌粟の花、百日紅、鳳仙花、玉簪、凌霄花、午時花、夏雪花、淡雪花、萱草、夕顔、旋花、紫陽花、山梔花、檜扇、槿花、夏梅、紫苑、臭梧桐、河骨、朝顔、紫茉莉、鶏頭花、鳥頭、萩、狄、糸芒、刈萱、女郎花、鼠尾草、芙蓉、藤袴、蘭芭蕉、深山樒、龍膽、曼珠沙華、藁吾、朝露草、蜀魂草、檀特蕉、彼岸花、茶の花、葭、蘆松に百合、八手花、梅嫌、ひむろ、復り花、殘花、名の悪しき花、一日も保たずに落つる花

○神佛に供する花

○神前の供花は、めでたき縁ある花を生けて供すべし。祝儀に生ける花と同様に心得べし。生け方は、勢ひよく苔がちに、水際すゞしく生けるべし。依て、名の悪しき花、滿開の花、時に後れたる花、枯枝、枯葉、蟲くひ葉、死花、死葉、針尖りあるもの等を嫌ふ。

神前には殊に榊を生けて供すべし。但し裏葉の見えぬやうに意を用ゐて生けるべし。

佛前の花も大概これを推して知るべし。

○毒木毒草

○毒木毒草は、諸流ともに取扱はぬことなり。禁忌のものを左に掲ぐべし。此他にても名の知れぬ草木は是れ亦嫌ふなり。名知れざれば出生も知りがたし。名の知れざるものゝみは、獨樂には如何ともすべきなれども、毒草は忌むべし。

鳥頭、八重の萱草、曼陀羅華、躑躅、川蜀葵、（一名午時花）、凌霄花、鳳仙花、油桐、野葛、臭梧桐、花蘇枋、玉簪、商陸、著莪、山あぢさゐ、紫羅草、蒟蒻、八手花、馬酔木花、釣吋狗骨、金英草、房苑、牛扁、深山樒、天南星、夾竹桃、

○花器

○花器は、金屬製、竹籃、陶器、樂燒等、家々の好みに隨ひて數多あれども、大抵左に圖するものゝ名稱を形どりて變形異體の雅品を爲せり。新古其數夥し。

花器名稱及び圖式

一重切

二重切

尺八切

百度切

あんこう切

あんこう

橋ばしら

獅子口

二重あんこう

花兎口

置筒あまたにして壷しがたし亂ぐひ筏三重五重好に隨ふて限りなし

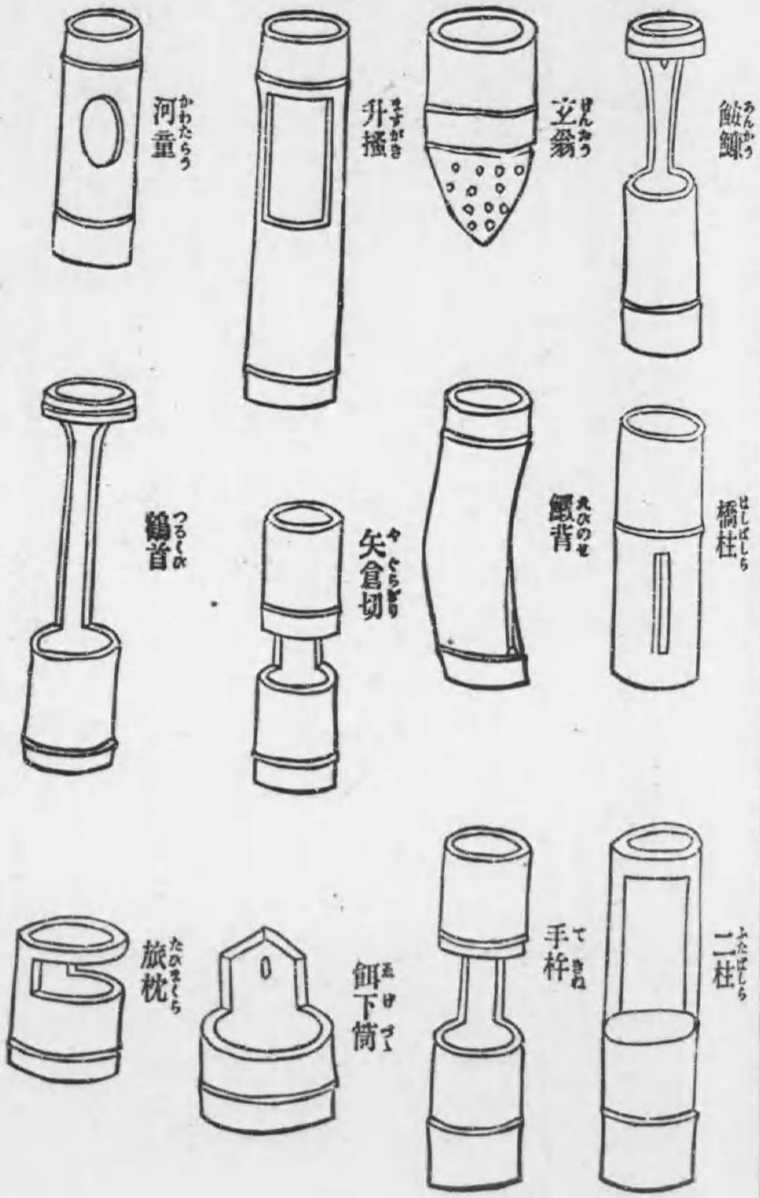
車僧

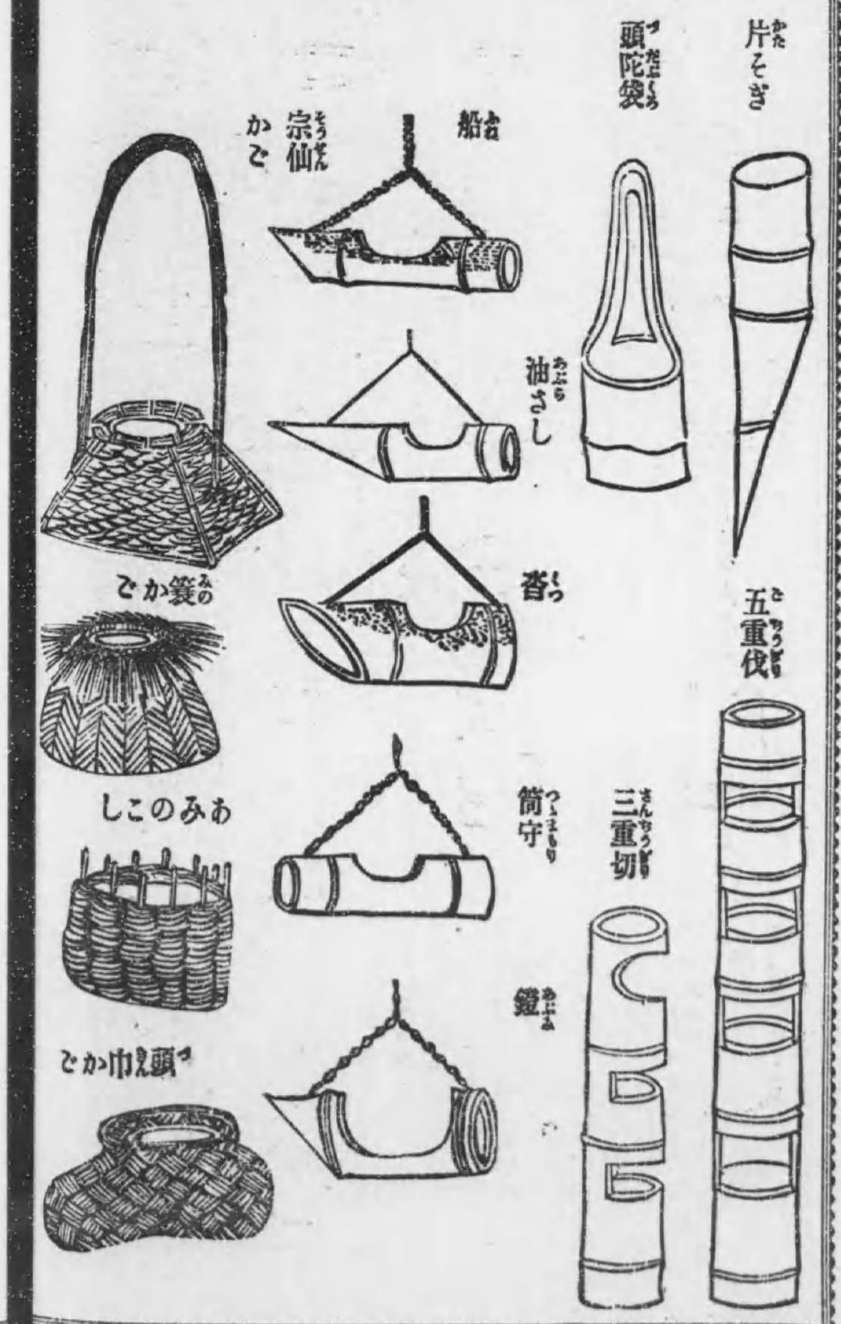
千代野

瓦あんこう

庸軒

淺澤




片そぎ
頭陀袋
船
宗仙かご
油さし
五重伐
三重切
筒守
鐙
香
ごか簑
しこのみあ
ごか巾頭

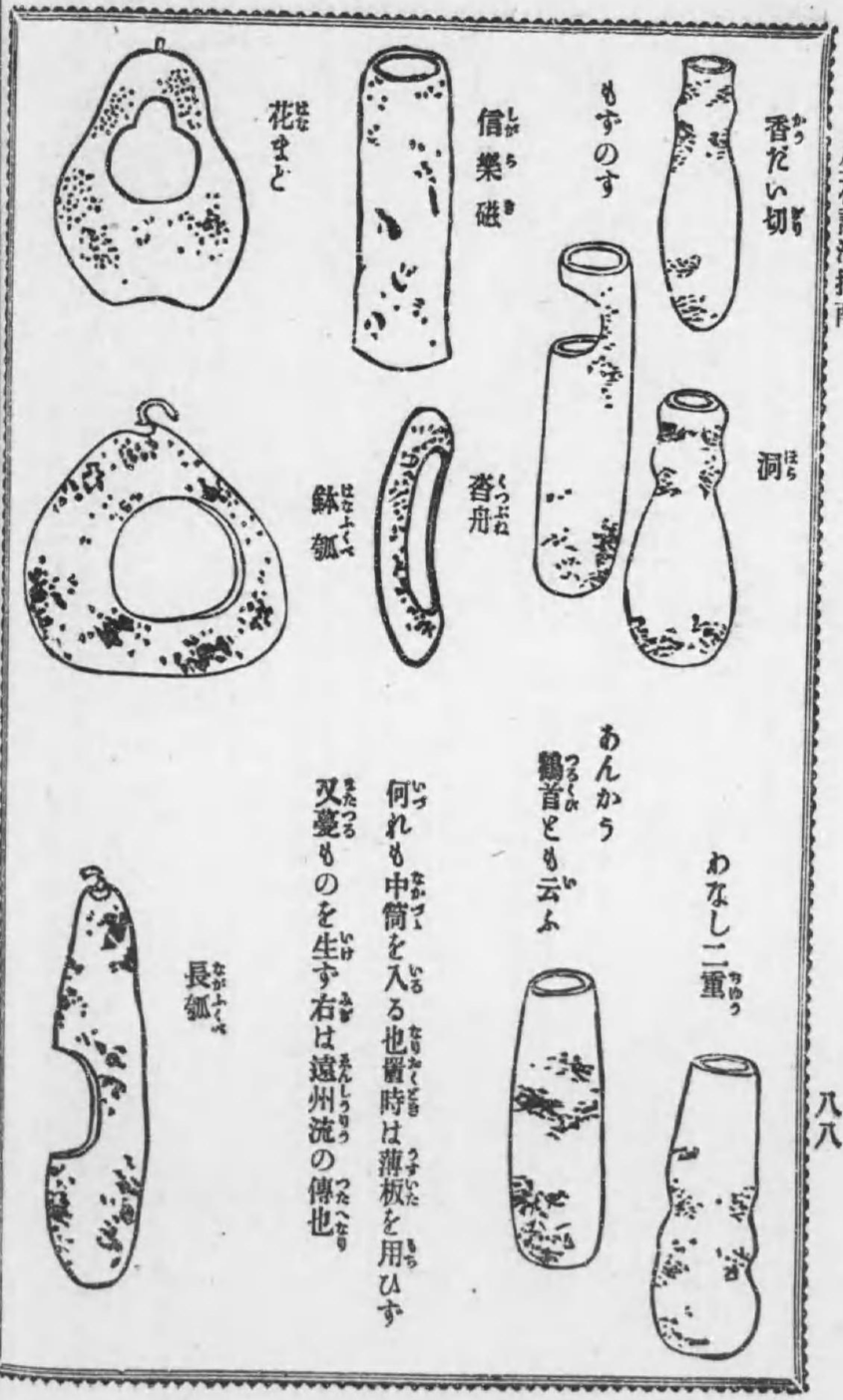
桂籠
餌かご
置かご
輝かご
肩すかし
長かご
遠州公の肩すかし
宗せんかごこれ宗せんといふ人はじめしとぞ
桂籠をはじめ輝かごに至り七種は利休の作なりといふ

俗に綿ふごといふ
まこものさらしにて造り
し物にていたつて古雅也

是は中にうけて生るかご也

桔梗口
鐵ばつ
あみらさき
唐人笠
同
細口
かや壺
たば薄子
ちぐ方四
たば角
中口
氷柱がた
いらた
砧
旅枕

水盤
或は
砂ばち
青銅船
廣口
巾着
丸壺
盞形
經筒
瓶釣
經筒
菱細口



何れも中筒を入る也置時は薄板を用ひす
又蔓ものを生ず右は遠州流の傳也

○花器の用捨及び取扱ひやう

○四季に應じて花器の用捨あり。春は、竹、中口、紫銅器、細口、百度よし。夏は、紫銅廣口、薄端、盤銅よし。秋は、土の中口、船、薄端よし。冬は、細口、百度、瓠よし。何れも客を請ずるには、殊に心得あるべし。

○四角なる花器は、角を陽とし、平面部を陰とす。此置かたは、上坐床へ用ゐるときは平らに置き、下坐床へ用ゐるときには角を少し前に出して明るき方へ向けるべし。

○竹花器の取扱ひやうは、始めに能く水に浸し、切口を拭き、それより花を挿るべし。始めに水にて濕さゞれば、筒の破裂することあるゆゑなり。

○百度切の筒は、外の節より下りたる所を前にすべし。竹の表は自ら節に勢ひありて肉厚し。故に裏表を能く見定めて生けるべし。

○土器の取扱ひ方は、藥の流れぐあひの風流なるところを前にすべし。總じて土器の類は、露を打ちて使ふべし。青磁の花器のみは露を打つに及ばず。青磁は原と印度の土にて久しく箱に入れ置くとも、濕りある故露を打つを禁ず。されば印度製にて無き、支那製、日本製の青磁にも

同様に露うつことを禁ず。

○金属製の花器にても露を打つべからず。

○籠花器は、三月より十月まで用ゐるべし。十一月より二月までは用ゐるべからず。

○手の付きたる籠は、花にて見切ることを禁ず。されども籠の花は、たつぷりと見事に挿るを本意とす。然るときは、花にて籠の手を見切ることあるべし。此時は片方ならば苦しからず。正中より四分六分、又は七分三分に分けて、三分の方へ花を寄せて挿るべし。正中を見切ることを大に禁ず。花をたつぷり挿るゆゑは、提籠に花を摘みて盛れたる心持なれば、澤山に麗しく挿れたるを風流とするなり。

○花器と薄板との取り合せ方

○圓き花器には圓き薄板を用ゐず。角の花器には角の薄板を用ゐず。但し、角の花器に角の薄板を用ゐるときは、左の圖の如き形ちにして、角ちがひに用ゐるべし。さすれば甚だよし。又、少し長き薄板は、方にても圓にても、方圓ともに用ゆ。此名をば、ゆき長の薄板といふなり。但し薄板は、疊床に用ゆ。板床には用ゐず。されと一説には、聊にても脚ある板は、板床に用ゆ。これは板と板との間透く故なりと云へり。

○花器の見立

○花器用ゐる方の大法は、牡丹、芍薬の類は籠の花器を用ゐるなり。蓮、河骨、燕子花の類は口廣物をよしとす。水仙の類は細口物よし。總じて長の短き物は砂鉢、薄端類よし。長の長き物は掛花器か籠の類よし。此他は花と器との取合せを面白くすることに心がくべし。竹を生けるに竹の花器を好まざるは言ふまでも無し、此類を能く注意すべし。

○花器の水量、花配り入れ及び増水

○花の挿れ方は、天地人の形を基とし、一二三、大中小と意を活かせて定め、さて花を生けるには、花器に對ひ、花配も入るべし。此時貴重なる花器ならば、花器の損せぬやうに紙を當てゝ緩々入れるべし。さて花器の水量は、花器の縁より六分下げて花配を入れ、其處まで水を注ぎそれより花を挿れ、生け了つて後に増水すべし。但し他家へ行きて花を生けたるときは、後の増水は其家の亭主に乞ふべし。これは水際を見せる爲めなり。されど亭主不案内にて辭退した

らば、強て乞ふべからず。自分にて増水すべし。

○花配は木の極を用ゐるべし。樣の枝は性粘り強くして用ゐるに便利なり。されど、祝儀の席には用ゐるべからず。樣花一日の榮と云ふを忌むなるべし。これを用ゐざれば、他の粘力ある木の枝を用ゐるべし。

○花配は、下の圖の如くに入るべし。花に風あたる所にては、根の留りを確かにすべし。婚禮席の生花などは別して根の留りを固くすべし。即ち圖の如く竹にても又は木の枝にても、前方へ確りと押さへし圖

花配入樣

花配之圖

○枝をわりかけて製へし圖

○枝のまたにて製へし圖

木の性はしかきものは深くさけて用ひがたし粘つよき枝を用ゆべし

へて動かぬやうに留むべし。

○枝數の多少に依り、或は花器の筒の大小に隨ひ、配り木の廣きを入れ、又は狹きを用ゐる等は見はからふべし。内の塗りたる花器に花配を入るゝには、枝の小口へ紙片を少しづゝ當てゝ入るべし。然なきときは、塗りたる部に瑾つき、剝げる等のこと有るもの故、注意すべし。若し股になりたる込木なきときは、花に准じて木を程よく割りかけ、披さて用ゐるべし。込木の太さは花器に隙ふものなれども、少し細き方よし。花器へ隨分強く込みて、此込の木を持上げる程なるがよし。樣は指木にて、能く根を生ずるものゆゑ、多く作り貯へおきて用ゐるべし。木を割りて用ゐるは、×此樣に花さす處を狹く、十文字のやうに込みて挿すべし。或は白箸にても可し。此込を至つて固くすべし。口狹き花器は、一文字に一本込みでも生けるなり。又、込なしにても挿すことあり。總じて込は、成るだけ目立たぬやうにありたし。花器の口より一寸ほども下げて込むべし。されど花器の淺きと深きと、廣口との差別あり。花も高きと低きとあるものなれば、花と花器とに准じて、時に宜しく見はからふべし。

○込は、花器に依りて心得あり。陶器の花器には込を強くすべからず。燒藥の内へ廻らぬ部は、別して能く破れることある故なり。總じて陶器等の土物は、注意すべきことなり。故に名器に

は花配木なしに挿す方あり。殊に寒氣甚しくして水凍るときは、竹と土物花器とは、速く花を揚げて水を去るべし。此時節には、多くは竹と陶器とに花を挿ぬがよしと知るべし。

○挿す花の、くづをれて立たざるは、草木いづれにても、根を割りて兩方へ披かせて挿すべし。

○花を生けて後の増水は、時候に應じて水量を加減し注ぐべし。春と秋とは暑寒外ゆゑ九分目に注ぐべし。夏は十八分にして、大暑中は十一分に注ぐべし。尤も筒の切口外の周圍へ、少し油を塗り置くべし。蠟の脂肪ならば最もよし。斯くすれば水は溢れずして十分たもつべし。さて又冬は八分目にして、寒中は七分目にすると心得、薄端は中の筒ばかりに水を注ぐべし。

○花留

○廣口、馬盥などに花を生けるには、花の根本を留むるに花留を用ゆ。これには蟹どめ、龜どめ卷水どめ、蛇籠どめ、碇どめ、銜どめあり。又、兎二ひき、鯉、龍、五徳あり。銜は一箇を一掛、或は一口と云ひ、組みて使ふなり。其組方に依りて、水鳥、男龜、女龜、海老、蟹、雙龜蛙、花車、片銜、富士の影、御幸、蟬、簗等の名あり。（各々組方あれども略す）

○左に花留數箇の圖式と、それ〳〵使ひ方とを記すべし。

○蟹は、上り下りして陰と陽とに使ふべし。又、一匹ならば坐數の形容に應じて使ふべし。但し花と花留とを陰陽になるやうに使ふなり。

○兎は、水草には禁ず。木賊、萩、小車、芙蓉等の類には閑靜に見えてよし。

○二匹鯉は、陸物に禁ず。水草に使ふてよし。

○龍は、水陸兩樣に使ふべし。卷水も同樣なり。

○碇は、船に使ふときは、往來しある船に使ふべし。決して泊船に用ゐるべからず。

○蛇籠は、水草に用ゆ。又、陸草にても多分川添の意にて用ゐるべし。中に砂石を入れて用ゆ。

○五徳は、流儀によりて、用ゐざる例あり。用捨すべし。

○強弱の枝

○強弱の枝の圖

——此枝ながくして詠めありといへども性弱し

此枝みぢかしといへども性つよし其性とにるを以て鱗の格に備ふ

草木ともに、それ〳〵姿ありて、花に三段の性あり。葉に三段の性あり。枝に三段の性あり。是れ九の性にして四季を守る。卽ち葉は芽ぐみて青葉と爲り、紅葉して後散ることあり。是れ三の性なり。枝は大中小と三段に延びる。出生各々斯の如し。

○蔓物の強弱

○蔓物強弱の圖

○如圖は蔓先なだれ下て性よわし

○如圖蔓先天にむかふ時は勢ひあり

○曲花に渦を挿んと欲ふ時は上座床なれば右旋に曲下座床なれば左旋に卷と心得べし

此所より蔓を切ときは左の如くになりて蔓先に勢ひつきて花になる也

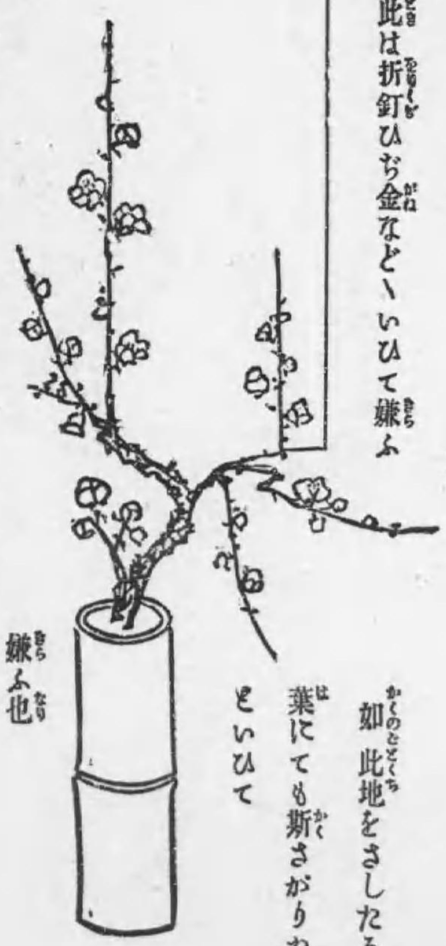
木物の枝にても同意なり

○曲花渦の心の圖

右旋の渦

左旋の渦

○草木挿方の禁忌



如此は折釘ひぢ金などゝいひて嫌ふ

如此地をさしたる枝を禁ず

葉にても斯さがりたるは露落しといひて嫌ふ也

如圖眞直に伸たるは上下横又は前へ對ひたる等何れも嫌ふ枝なり

○如圖なりたるは折釘とはいふべからず禁ずるに及ばず

此の如き枝は心を切ゆゑに身を害ふ

枝といひて大に禁ず

○上の如く横へ眞直にさしたるも

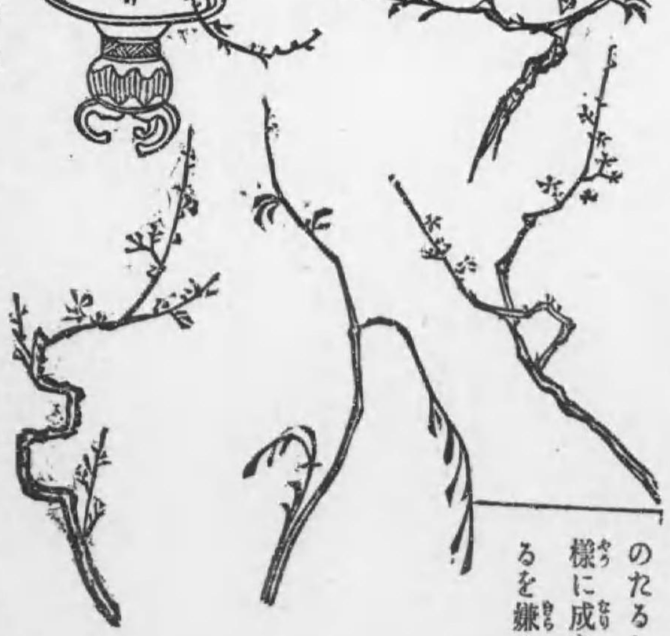
○此のごとく根もと捻れ左右より入違ひたるはひがさなどゝ云て大に嫌ふ也

又枝うち違ひて十文字の如く見ゆる等を禁ず

圖の如き枝は生れて性つよければ免すことも有といへども好みて挿べきに非ず

○如圖花器のふちへ枝のすれたるを禁ず是を花瓶ずれといふ

○此ごとく見切を嫌ふ



○病の枝ふもしろく見ゆれども性あしければ禁ず

此如く露のたるゝ樣に成たるを嫌ふ

○圖のごとく片葉片枝なるを禁ず

○かやうに弓を引如くなりたるを禁ず

○左のごとく大輪を低ふ遣はあしく

○此のごとく枝にて穴の出來るを禁ず

○此ごとく剛力へ同じ樣に股になりたるを嫌ふ

葉まへに有てうしろかげに遠く見するは苦しからず

如圖左右同じ長さにて花の並たる形を禁ず

○此ごとく鋲打たる樣になりたるを禁ず

○此ごとくだん〳〵に花を入たるを嫌ふ

○此ごとく左右同じ樣に出たるを禁ず

○此如く眞正面に花の向たるをかゞみ花又は的花など〳〵いひて禁ず

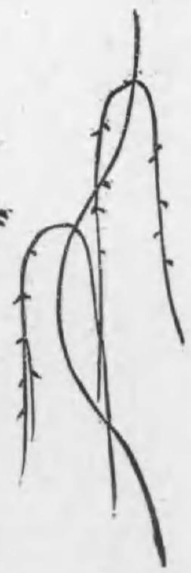
○下の圖のごとく左右へふなじ樣に出る事を禁ず

○此ごとく葉の重りたるを禁ず花も又同樣也△のごとく下りたる葉をいむ○を天蓋ばなと云

○此ごとくふり返て顏を見あはせたる如くなるを禁ず

○此のごとく天の陽氣を受ざるを死花と云

○斯樣に左右へ抱き合たる如くなりたる枝を嫌ふたとへうつむきて咲出生の花とてもなるだけは取なはして上をむくやうに入べし葉も力なく下へ垂たるは死葉なり



○此如く兩方へ引ばりたるをいむ是は初心の內は心づかずして よく挿ること有前後左右へ同じ長さにてひつばりたるを禁ずいづれなりとかたかを少し切てよし

此ごとく前より後へまわし又は後より前へ廻すは悪し

○此如く前後へ長く出るを禁ず

○圖のごとく花器の正面へ葉の覆ひかゝるを禁ず

○右に同じ

○此ごとく會釋の花うしろより出てやどり木の如く見ゆるはあしく同木

同草は苦しからず

○圖のごとく木を草にてつゝむことを嫌ふ

○又木にて草をつゝむことも惡し

○此如く平に葉の見ゆるを嫌ふ也但しいたつて微き葉は禁ずるに及ばず

○葉にて花を包み隠すを禁ず。少しにても見ゆればよし。菊の花下へ向き、或は横へ向きなどして都合あしく咲きたるは、大菊、中菊は、花の正中より導き

で針金を花の中に下圖の如くさし入れて繞めなはすべし。七八分も刺し通すなり。

○水際十文字とて、水際にて十文字になるを嫌ふ。水際は直なるをよしとす。總じて往昔より挿花に法度として嫌ふことは、皆見ぐるしき事のみなり。別して十文字は、水際のみに限らず、何れにありても嫌ふと知るべし。

○見切は、諸流ともに同じく嫌ふ。其見切とする形ちも同じ。形ちは先づ枝葉横になりて眞の木へかゝり、覆へば正面より眞の木を見切るなり。眞を見切るは第一惡しゝ。眞ばかりにあらず。其他一體の姿の内、何れの處にても見切るは惡しゝ。且つ添もの眞の木へ横に出でゝ掛り、見切甚だ惡し同性のものにて少しの見切は、其品に依り其姿の所に依りて許すことあり。是れ品に依りて多く有るものなり。

○見隠しは、これも諸流ともに同じく嫌ふ。水際の留の花に多く有るものなり。何れの處にても正面より見るに、後ろへ隠れて見えぬを云ふなり。されども、其生れにてある花は、隠れありてもよし。わざ〳〵挿したる花の隠るゝは、故なくして隠るゝゆゑに悪しとす。

○兩挿とて、左右に同じやうに挿したるを嫌ふ。

○兩垂とて、左右同じやうなる態に枝垂れたるを嫌ふ。此病は枝垂柳に多し。

○鏡花とて、正面より見るに、鏡を立て置きたる如くに見ゆるを嫌ふ。此病は別して菊の類に出來るものなり。鋲うちたるやうにも見ゆ。

○重り花とて、同じ形ちに重りて着きたるを嫌ふ。花葉ともに同じ。

○死花死枝とて嫌ふあり。これは天蓋花の類を謂ふなり。少しにても仰向きたるはよし。但し、自然に傍向きて出生する花の性もあれど、これとても成丈は手入れして、心持ち仰向くやうに取直して挿すべし。又、花の縁なき處に出でたるを死花と云ふ。同じくは其縁なき處へ、枝も花も共に出でしを專ら擇むべし。是等は悪しきが中の悪しきことなれば、諸流ともに忌み嫌ふ。

○胸突枝とて、正面より見るに、向ふの人の胸を指す如く、眞直に目立ちて出でたるを謂ふ。これを向ふ枝とも謂ふ。枝葉ともに同じ。持出しの枝に多く出來るものなり。能く注意すべし。

○壁を刺す枝とて、胸突枝の如く、正面より見る後ろへ、品も無く眞直に出でゝ、壁を指す故に嫌ふ。此の如く左右へ出るも同じく嫌ふなり。尤も前後左右ともに同じ。

○剣葉とて、正面より見て、葉の小口ばかり見ゆるを嫌ふなり、葉蘭、燕子花のやうなるものにまゝ多し。

○地を指す枝葉とて、水際枝出し等のうちに多きものなり。眞直に下を挿すを嫌ふ。

○左右指枝とて、左右へわけも無く指したるばかりの枝を嫌ふ。

○猪目花とて、上一つに下二つづゝ一ッ所へ並びたるを嫌ふ。

○引合とて、兩方二本出でたる枝の同じやうになりたるを云ふ。これは嫌ふ。

○三ッ眞とて、三つ揃ひて出でたる枝は、いかにも嫌ふ。

○花葉数とて、一花一葉、四花四葉、六花六葉は挿すべからず。諸流ともに忌む。

○片指とて、片々へばかり指す形ちを嫌ふ。

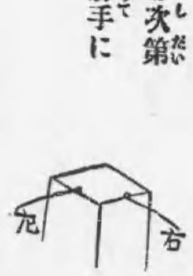
○生花に嫌ふ姿の圖解

床の間主客の次第にしたがひ勝手に入べし

花の眞向になるを釘かゝしと云

枝先客にむかふをきらふ

かくのごとく何にても花だん〳〵にかたより並ぶを段々花とてきらふ餘はこれより出たる〳〵せ病なれば大ていをして忌さゝべし



角形の花生は角を正面に見せて主客の位にさすべし角へ花を出すべからず

たけ〳〵らべ又猪目ともいふ

色をはさむを色切と云

しんを見切枝也

○露をとしといふ葉也

○一花一葉

○一花一葉は挿けるべからず。何故とならば、葉一枚に花一輪咲くものにあらず。又、葉二枚に花一輪も好ましからず。されども珍花にて、花一輪より無きとき、止むを得されば葉をあしらひて生けるべし。一輪の花滿開ならば陽中の陰なり。莟ならば陰中の陽なりと心得べし。是等は實に止むを得ざるときの事なり。

芍藥など一輪生けるときは、花の上下に葉を使ひて、葉の間に花を含ませて挿けるべし。

○生花に八つの嫌ある事

○八ッの嫌の名目は、古今、遠近、三木、四草、助考、投木、捻り、十文字とす。

○古今とは、一季過ぎたる花に當季の花を添ふることを嫌ふ。是れ、死花と生花と一瓶に雜る故なり。

○遠近とは、後方の野を見せ、前に山を見するを嫌ふ。野は草にて山は木なるが故なり。

○三木とは、木ばかり三種生けるを嫌ふなり。

○四草とは、五種挿すとき、其内へ草を四種挿すことを嫌ふなり。木にても草にても一體にて五種無くば、木の數を多くし、草の數を少く挿すべし。是れ陰陽和合の道理なり。又、七種の花を挿すとき、其取合せに木を三種と草四種とを挿すを、みつさしするさうとて忌む。

○助考とは、木を靡けて、其枝に草を持たせて挿すをきらふ。

○投木とは、木の根を草にて隠すをきらふ。

○捻りとは、草木挿花のとき、草の根と木の根と入違ふをきらふ。

○十文字とは、眞を横に切るをきらふ。

○生花用捨の事十五箇條

一　挿花一瓶の内に同じ色を挿さゞる事。
　但し貴人の所望に依りて、已むを得ず挿すことあり。

一　庭前の花を挿さゞる事。
　但し獨樂稽古には如何ともすべし。又、所望に依りて已むを得ず挿すときは格別なり。

一　丘物と浮物とを一瓶に挿さゞる事。

一　水草を懸花器に挿さゞる事。

一　水中より低き所は無し。然るに水を高く置くは、坐敷へ對して無禮なるが故なり。

一　紅と紫とを一瓶に挿さゞる事。
　紫の朱を奪ふを忌むなり。紅き色を淡くするを嫌ふ故なり。

一　針とげあるものを挿さゞる事。
　諸流ともにこれを用捨すべき事とす。長春、木瓜、薔薇の類は針とげあれども諸流に挿すされど、客に所望するなどは斟酌すべし。

一　匂ひ悪しき花、並に石榴、百日紅の類は挿さゞる事。
　木犀、沈丁木などの匂ひの好き嫌ひあるものは、客花には用ゐるべからず。但し自已の獨樂には用ゐるも苦しからず。

一　草にて木を包み、木にて草を包む事。
　諸流ともに同じく禁ず。稽古獨樂にもすべからず。

一　切れ葉、折れ花を挿さゞる事。
　燕子花の類に多くあり。これを挿すを嫌ふ。時節によりて用ゐることあれども、常には

用ゐるべからず。賞翫の花、見切などするときには、已むを得ず折りきることもあり枯葉、よれ葉などは猶更のことなり。水仙なども右に準ずべし。

一　借葉、借花を挿さゞる事。

これは出生の趣に違ふ故に嫌ふ。但し貴客の所望ならば、時宜に隨ふべし。好みてはすべからず。

一　賓相の花を嫌ふ事。

花も葉も少く、見所なく、いぢけたる姿を嫌ふ。閑静と云ふとは異なり。閑静は宜しけれど、賓相は嫌ふ。彼此れ混ずるべからず。

一　床縁より外へ花葉の出るを嫌ふ事。

置花、懸花、枝物、蔓物、何れも總て床縁より外へ出るを嫌ふ。過つて花に觸るを厭ふ故なり。

一　支へ木を用ゐざる事。

つかへ木、足木は決して用ゐず。是れ甚だ拙きゆゑなり。一説に、葉蘭などは根を結びて活ると云ふ。されど、必ず用ゐるべからず。流によりて釘、針、鐵、絲等を用ゐることあり。甚だ拙し。

一　花器にあらざるものに花を挿さゞる事。

珍しき器たりとも、出所、使ひ方知れざる器物等の、總て花器にあらざる物を好んで用ゐるべからず。但し大會などには、生の知れたる珍器は用ゐるも面白し。されども客待花は花器に定まり無き器を用ゐるべからず。出生知れざる外國物などは、不淨穢物等有らんかと恐るべし。

一　花ある物葉ばかり、葉ある物花ばかりを挿すを嫌ふ事。

立華には著我などを專ら葉ばかり用ゐれども、生花には胡蝶花とて、花ある時ばかり挿す。されども好んで挿すべからず。蔓珠沙華と夏水仙とは苦しからず。此二草は冬季に花無き時に葉を生けず。皆出生にかなふ故なり。

○流しの枝の使ひ方

○都て花形は、ながしの使ひ方ばかりにて種々の形容の造れるものなり。是によつて先づ初心の間は、只天地人の三體を正しくして、一通りを能く挿け習ふべし。土達の上は時に隨ひ模樣によりて種々の形容に生けるをこそ、手練とも巧者ともいふべければ、流しの使ひ方を次にあらまし圖を出せり。凡そ一形にならざるやうに、いろ〳〵の花樣に廣く挿るを本意とすべし。

左勝手

内流し二重留

右勝手留流し

同上内流し

同上眞流し

左勝手眞枝垂ながし

右勝手前流し

左勝手うしろ流し

右勝手前留流し

左勝手
後留流し

右勝手前内流し外留

同上
前内流

右勝手前枝垂流し外二重留

同上登流し

右の圖より工夫をもつて種々の曲花を挿る也

○四季會釋の差別

○舊正月、梅の會釋には、蕗、齒朶の類ひよし。筒は一重二重等よし。廣口の内眞の馬盥は用ゐるべからず。尤も眞の花よし。

○舊三月、桃の會釋には葉物よし。舊三月は彌生とて、いよ〳〵草木生ひ出づる故の略語なり。既に夏來りて草茂る形ちを挿るべし。形ちは草の生け方よし。女子の祝ひ月なれば、柔らかなる形ちをよしとす。

○舊五月、菖蒲の會釋は二重なれば、別けて挿るべし。廣口に水澤山なる挿れ方よし。

○舊七月、蓮の會釋は、二重等の時も用ゐるべからず。總じて夏は廣物よし。眞の形ちにて中央に生けるべし。

○舊九月、菊を大、中、小に取合せて挿るべし。尤も大菊に會釋ふには思慮あるべし。

○右五節の花、古來の定例とて記し來れども、強てこれに限るべきにあらず。有るに任せて宜しきに隨ふべし。一説に舊正月の花とて、男女の松に紅白の梅を挿れ雜せるを規矩とすることあれども、原來木に木を會釋ふことは好ましからず。殊に松は萬木に勝れ、梅は花の兄たり。これを挿れませることあるべからずと云へり。心得あるべし。尚は會釋の仕方を圖にて示すべし

斯のごとく心にもたるゝ時は心を取のくれればたちまち横に倒るゝの形容あり

正面を見ざるを忌

尤下の葉正面を見切り

上の葉正面にさわりてあしく

此葉正面にかゝりてあしく

右を直して左のごとくすれば會釋に力ありて風情もよし

此間すくをよしとす

正面さわりなくあざやかなるをよしとす

右のごとくにすれば心をはなれたりとも一種の花樣ありよく〳〵心をつくべし

此あしらひ心をはなれば力もなく風情もるゝいはゆる死花となづくるものなり

馬蘭五枚のあしらひ

連翹に馬蘭五枚のあしらひ

大菊馬蘭雜生

ばらんにて人の備をなす

木物に二枚のあしらひ

同七枚小菊のあしらひ

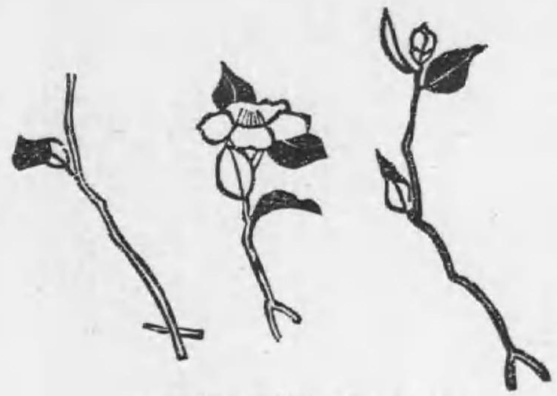
人枝三枚馬蘭二枚の草のあしらひ

馬蘭三枚大菊雜生

木物に馬蘭五枚のあしらひ

馬蘭は二枚以上二十枚三十枚心に任すべし

あしらひは何れぐれつく物なれば
圖のごとく根をわりて開き甲ゆべし



又左なくば根をわりかけて竹をかうがいのごとくさすべし

○正面に花葉ともにかゝらずあざやかなるをよしとす

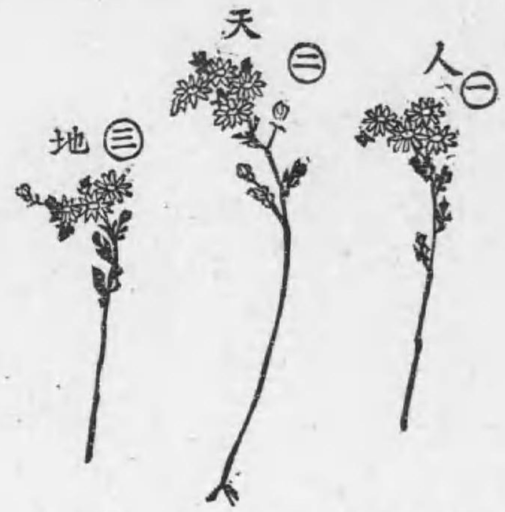
右は二本にて三體を備ふ

此間をひらくべし

此ごとく正面を見切るをきらふ

右に同じ是亦同じ

小菊三本の會釋圖のごとく葉をこぎ取て長短をさだめ



よくくためて枝をこしらへ一よりだんくし次第にさすべし

○先はじめに一のえだをさしたる圖

つゞきて二のえだをさしたる所

○三のえだにて留たるところ

同五本の會釋

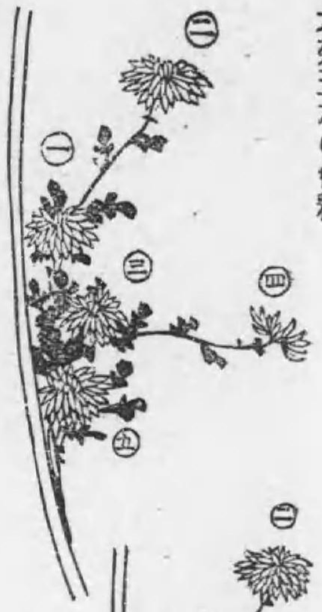
○初に一の枝を挿すこれを流義によりて人ともいひ用ともいひ行とも體ともいふ次に二の枝をさす是人の副也

次に三の枝をさす是天の副也

斯て四のえだを立る是を天の枝といひ又心といひ或は眞とも用ともいふ

而して五の枝にてとめる是を地の枝といひ草ともいふ

大菊五本の會釋



同三本のあしらひ

三本の時は上の五本の内にて四と五を除きてかくのごとし

印のごとく次第にさすべし尤も此順に定まるにはあらずといへども大抵これにて思慮すべし但し花の都合によりて時の宜きにしたがふべし

○木二本の時草のあしらい三五本也尤も是も石竹のごとき細く小きものゝ知がたきものは時に順ひ構なし木一本なればあしらひ二本なり草木體用あはせて半の陽數に入べし

梅もどき二本　葉蘭二枚　小菊三本

馬蘭を眞のたすけにはさみたる圖

是は菊三本をはじめに入れ次にばらん二枚次に梅もどきの眞而して留の梅もどきを入る也

馬蘭會釋挿方

○あしらひは心の横又はうしろにそゆる也

心にそひて別に一種の花樣あるべし

しるしのごとく次第にさすべし

○心を取りのぞきてもあしらひ又かくのごとし一種の花樣あり

○圖のごとくしるしの次第にさすべし尤あしらひは心に添て心にもたるゝことを嫌ふなりたとへば心を取てのくるともあとにあしらひのみありて一種の體をくづさゞるやうにすべし是あしらひの心得第一也

○會釋挿方の心得

すべて何の草木にても正面をかくすべからずたとへ葉一まいにてもさわる事をきらふ也

○此ごとく花葉にて正面をかくすをきらふ也

○此二種ともにいさゝか力あれども忌事おはし用ゆべからず

○會釋すみやかなる圖

此ごとくひらくをよしとす

此ごとく付たるをきらふ此間はずいぶん開くをよしとす

此葉一まいかならず有べし

正面のあざやかなるに心をつくべし

○諸流挿方圖式

梅　紅梅なり

器さび竹一重

薄紅梅水仙

器南京染つけ

松竹梅　釣舟

柳　山茶花

二重橋杭

茶牡丹

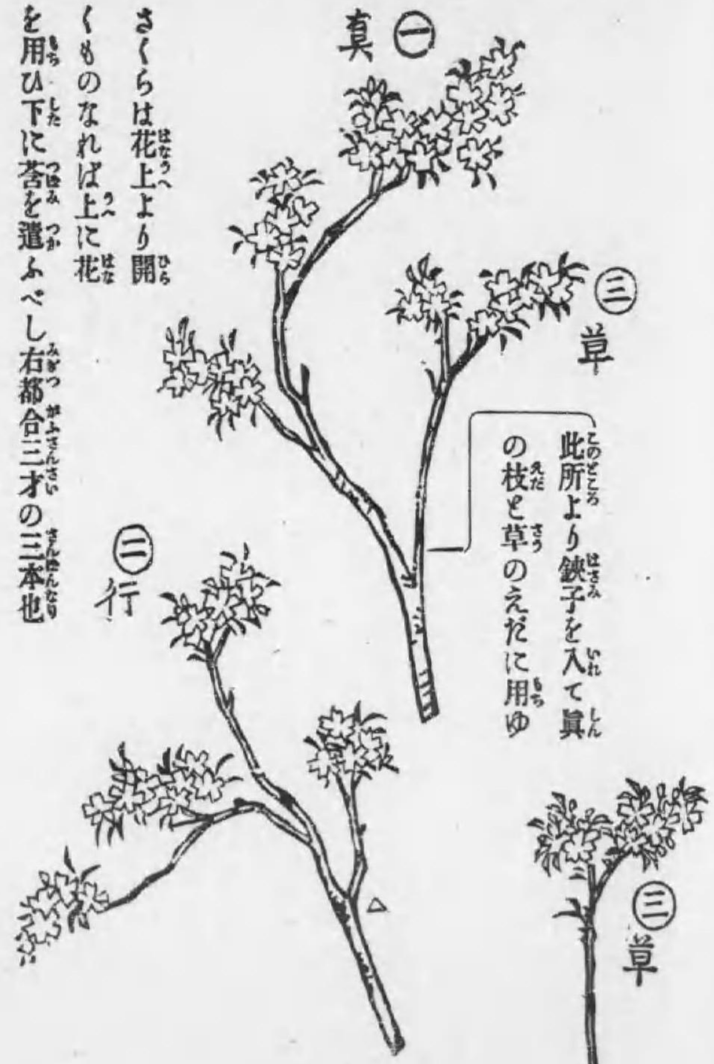
金雀さゝん花
蓮翹　麗花
器　伽羅木

三聖柳
朝露あるうちに切て根を湯につけ爾後水へうつすべし
器　白磁

彼岸櫻　椿

器ひしき竹

櫻を挿るに要する天地人、眞行草の枝のこしらへ方を左に圖にて示す。



さくらは花上より開くものなれば上に花を用ひ下に苔を遣ふべし右都合三才の三本也

櫻の種類多しといへども山さくらを生べし其餘は好ましからず

地の枝通例より高く入べし

㊀天

㊁人

㊂地

○櫻は花を澤山につかひ賑やかにさすべし花すくなくして閑靜にいるればさくらの本意をうしなふ也

一説に

○茶席にては櫻を入ず是はあまりに花のうるはしすぎたる故なりとぞ

燕子花

花菖蒲

○燕子花の挿方は、先づ三葉を用の所に挿れ、それより花を挿れ、體の冠葉一枚を挿れ、次に後ろに添葉一枚挿れ、其下へ苔を一本挿れ、留に後ろへ水吸葉を挿れ、それより露受の葉を挿るべし。花二輪、葉七枚の挿れ方左の圖の如し。

○三枚葉の圖

○陰陽の葉の圖

○陽の葉は左旋にして少し長く土へ組也

○陰の葉は右旋にして短く下へ組なり

○天地陰陽の中に萬物立理にして一枚の葉を生ず是を芽吹葉といふ

是則ち天地人の三才なり

○一輪挿の圖

花一本葉三枚

○五枚組の圖

花二本三枚葉を後に入る

○燕子花の風情は多分葉を以て作るものなれば葉先ひらき亂たる葉は惡し強き葉の直なるを上しとす

○尤いづれも生れの儘にては遣よく締よき葉は些し

故に一枚づゝもぎ放し、恰好よきやう長短を拵へ、二枚にても三枚にても組易きを寄せて、原の如く組合すべし。

○燕子花の葉組するには、口中の唾にて葉を着ければ放れぬものなり。早咲の燕子花は、一枚一枚に切りはなし、水に挿れ置くべし。葉の凋れること無し。

○花溜に養ふ間も、始終眞直に立てゝ活け置くべし。斜に横たへ置くときは、花首曲り易く、花も背けて咲くなり。能く揃へならべて、細竹か樅の枝などの直なるに、引さき紙か打藁にて緩く結ひ付け、水深く活け置くべし。尤も曲りて面白きことも有れども、多くは悪く癖づくものなり。葉も一旦水揚したれば、横に臥させて時々露を打つべし。

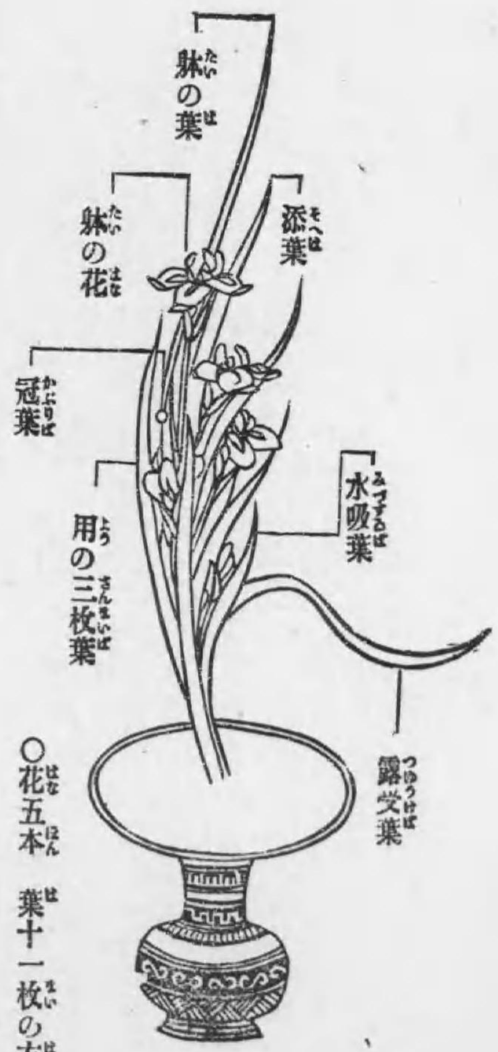
古人は花は生くべし。葉は生け難しと曰へり。すべて草木何によらず、花よりも葉を使ふこと専要なり。別けて草物は、花よりは葉を使ふを重しとすべし。

○九枚花二輪の圖

○燕子花十一枚の挿方は、初めに三枚を用に挿れ、それより花を挿れ、其後ろへ花より少し高く冠葉を挿るべし。（但し花葉ともに用の葉よりは少し短くすべし。）それより體の花を挿れ、次に添葉を挿れ、又、花一本、其下に葉一枚、又、花一本、其次に葉二枚、それより留の苔一本

○十三枚
花三輪の圖

○十五枚
花二輪の圖



○花五本　葉十一枚の方

挿れ、次に水吸葉、露受葉等を挿る。都合花五本、葉十一枚なり。此他に挿れ方種々あれども一二を出して之を略す。

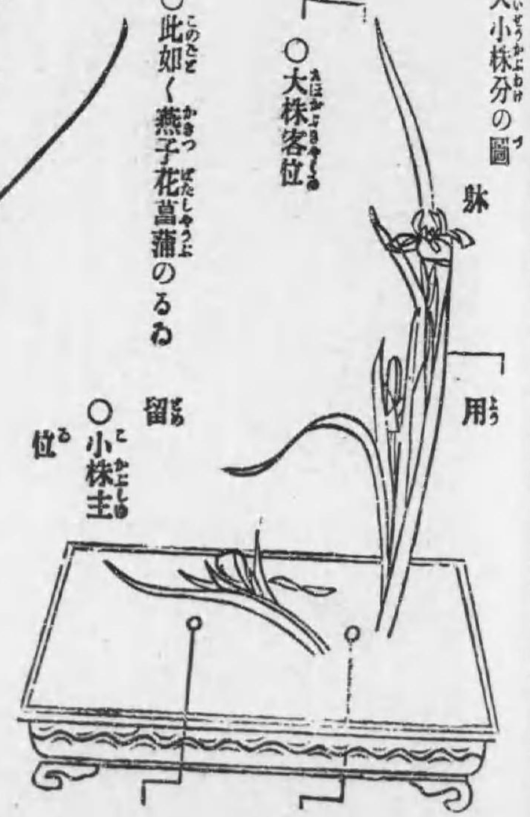
餘はこれに准じて考ふべし。

次に大小株分挿方の圖を示す。

陸の草花を分けて挿るを株分と云ふ。木物なれば谷間と云ふべし。

都て花の高さ十分一を以て株の間の幅と心得べし。

大小株分の圖



○此如く燕子花菖蒲のるね

葉のそばの正面より見ゆることを禁ず

此間花の高さの十分一也

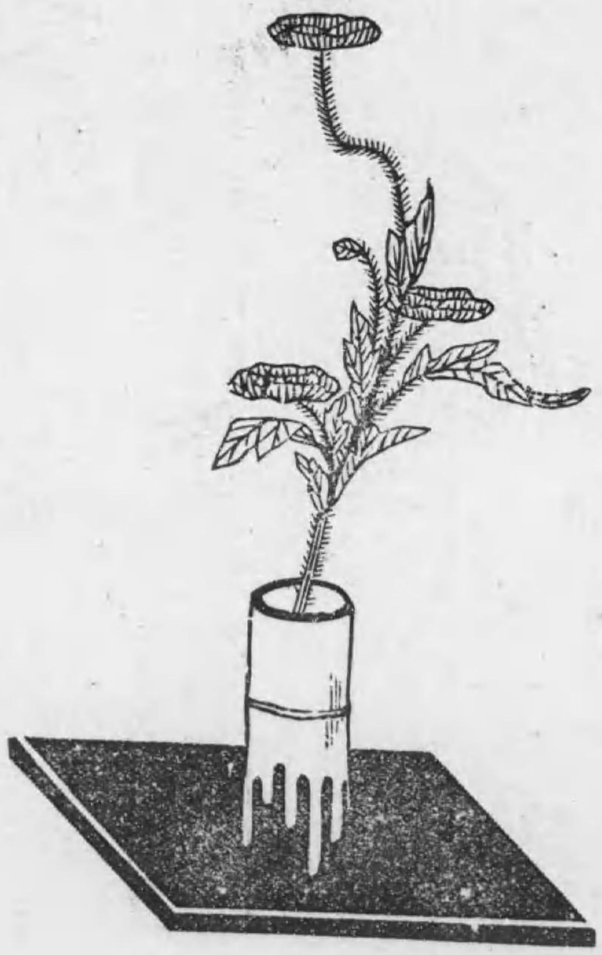
此小株、まへにふり出して生るべし

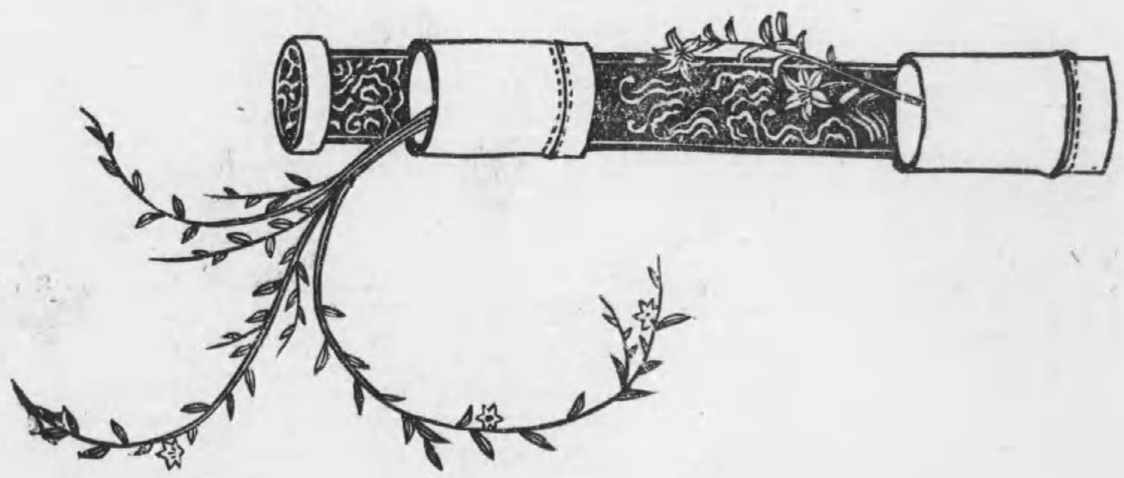
鈍葉の圖

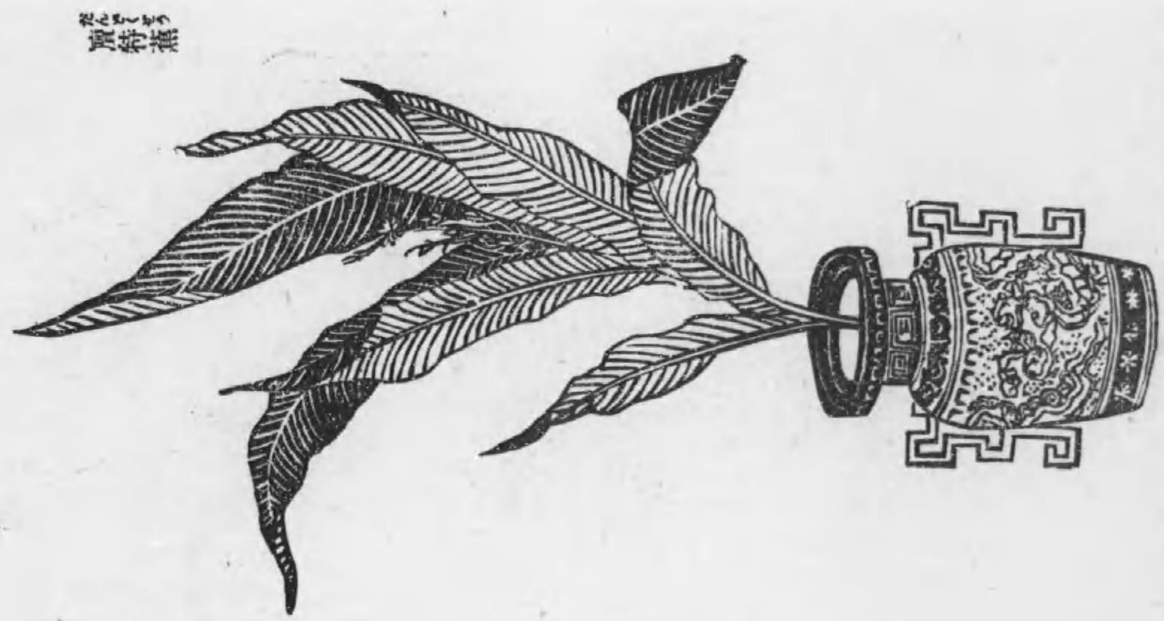
芍藥花

爲朝百合花

美人草



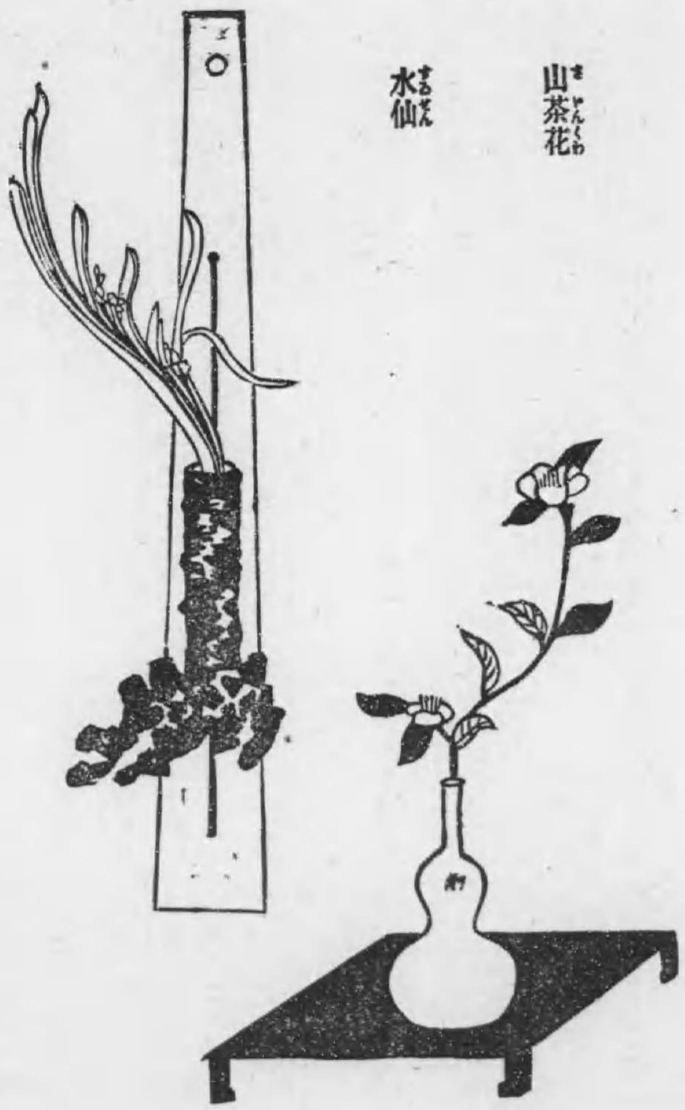

夏もつくわうばい
姫ひめゆり百合


南天とそうの
南特瓶

川骨
上下
一瓶の姿

蔓梅もどき
中菊根じめ
蔓先

大菊赤
同赤抱


山茶花
水仙

○水仙の葉組方の仕様

○水仙はすべて葉性つよく只一よれなるを撰みて生べし花は縮て延ざるをよしとす。

一よれの圖

二よれによれたるを次とす

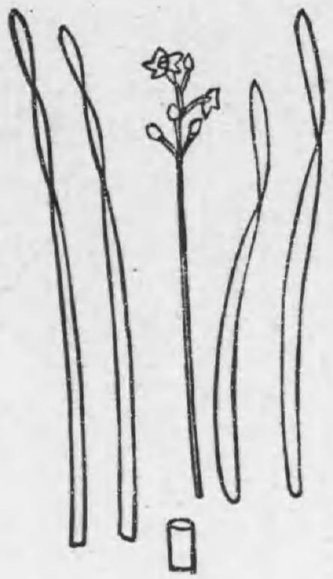
如圖よれ過て葉性の弱きは直りがたし。しかれども葉性つよければ一よれにためなほるもの也

○右葉の拵へやうは先一本取あげ白根のところを静にもみ又は捻て其莖根をやはらげ花を前にぬき夫より葉をだんだんに抜べし尤性は二枚づゝ重り出る者ゆへ葉の癖をなほし重ねて用ゆべし

はかまは花留の用ひがたき花器又は曲ある體をつかひ度節に用ゆるゆゑ破れざる樣にのけおくべし但したけ高く入ざる時は始に白根と共に伐すつべし。

○一枚〳〵ぬき放す也

○此扱はなちたる葉を一枚づゝ直すべし但し外の長き葉は日表の凹なる所又内の短き葉は日裏の凸の所を食指中指上指等の三指にて板の上に押あて本より末の方へ葉の剛弱に随ひ五七遍もしごき直し長短を程よくして重ねべし



○くせをなはし重ねたる圖

○口中のつばにてつくれば よく引つく也

○しごきて悪き瓣直す圖

○程よく重ねて後はかまをさす圖

○はかまさしこみたる圖

○葉のもとを少しそぎてさしこめばよくはまる也

但しあまりに強くしごき過れば葉の色あしく成て賤しつやの落ざる樣にすべし

はかまさしにくき時は外の長き葉より一枚づゝさしこむもよし

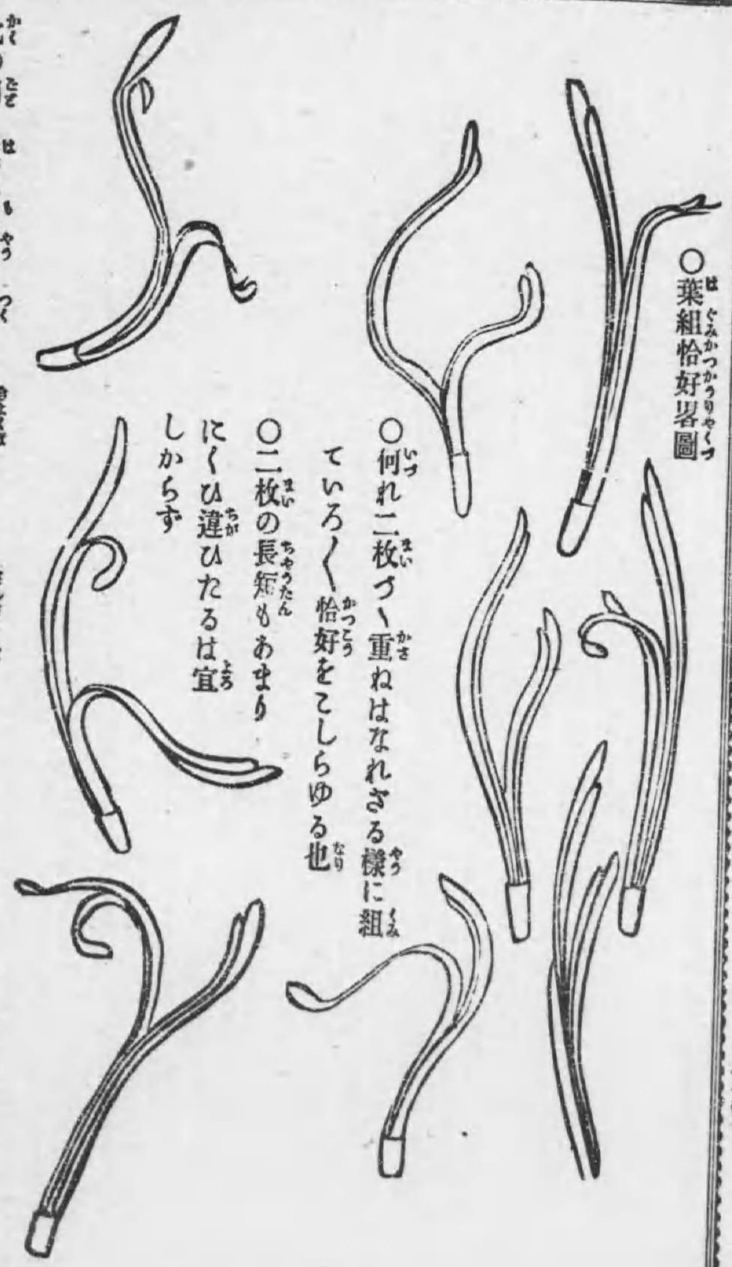
○花を竪に咲するは苔の花を取よせて其苔に鞘をかゞけて咲せば竪に勢ひよく咲なり。

○三本組上生たる圖

○時節は九月下旬より正月まで生べし

○組上こよりにて假にくゝりおき水に入おき後取出し入べし

○數本入る時は葉の形種々につかひて同じ形容の重ならざる樣風流に生べし



○葉組恰好畧圖

○何れ二枚づゝ重ねはなれざる樣に組ていろ〳〵恰好をこしらゆる也

○二枚の長短もあまりにくひ違ひたるは宜しからず

此の如く葉に模様を付るを曲葉といへり三曲葉はふもしろげなれども兎角に賤く好みて挿べきにあらず

馬蘭七枚組の圖

日表葉六枚

日裏葉一枚境葉といふ

先づ挿方は、葉七枚組みて挿るなり。左右は時宜に隨ひ、何れなりとも隅の向ふへ寄せて三寸六分あけ、前へ三枚挿れ、七枚と三枚との間の水中に、苔と開きと二輪挿るべし。但し尖葉は花に添へて二本入れ又、三枚の根本より、少し前の方へよせて半開の花に尖葉を添へて水中に入れ留は砂を用ゐるなり。葉蘭の葉の卷きやうは、火箸を暖め、葉さきを挾みて、きり〳〵と卷くなり。又、冬は枯葉を雜せて生けることあり。これは葉をよきほどにむしり、線香などに火を付け、むしりたる小口を燒くべし。

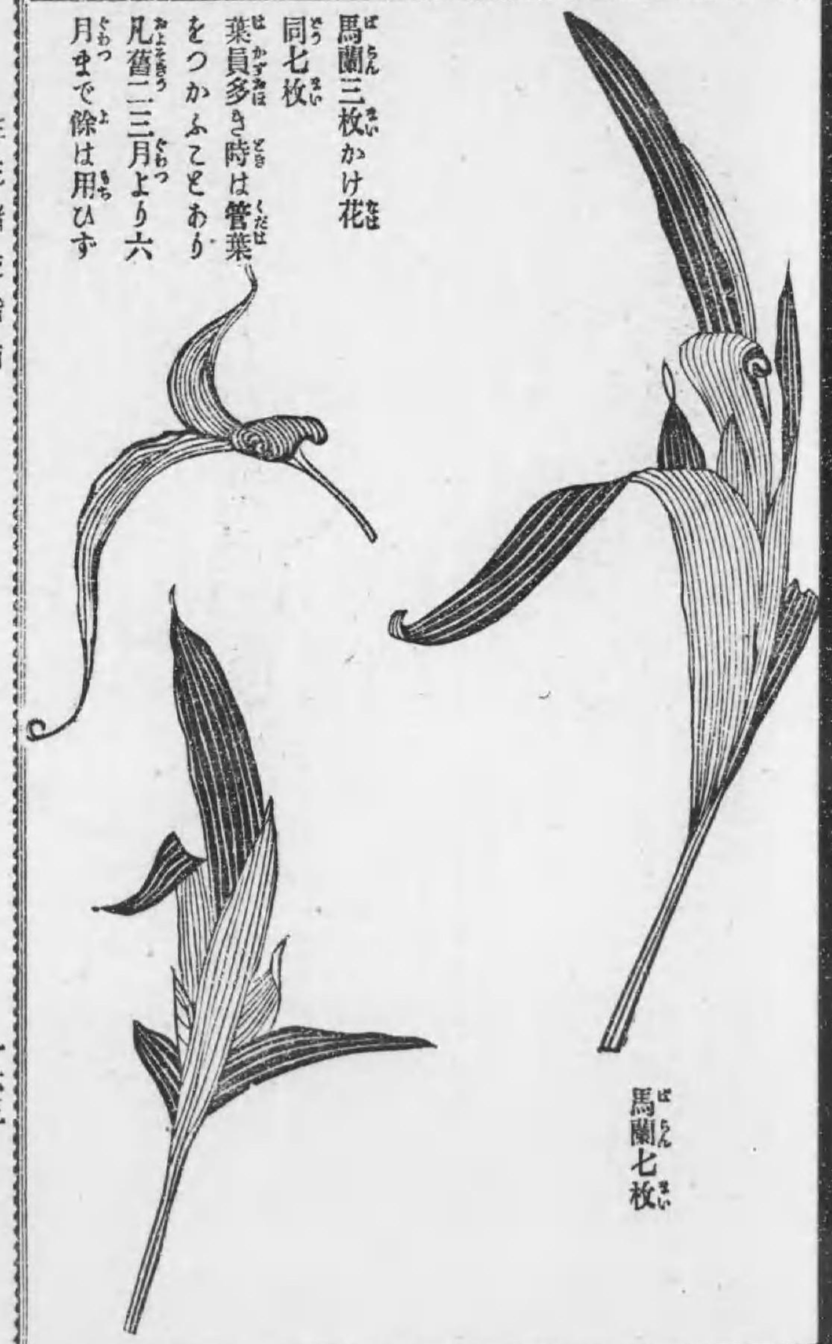
○葉數多きときは卷葉を入ることあり。舊二三月は左旋に卷き、舊三月下旬より四月に至りては右旋左旋と雜へて使ふなり。又、五月より後れて出る葉は、都て左旋と心得べし。葉物は何れも斯の如し。

馬蘭三枚

馬蘭の葉の盛は舊十一月なりといふ

盛の旬には枯葉を用ひず

二枚のかけ花卷葉は秋の中旬也



馬蘭三枚かけ花

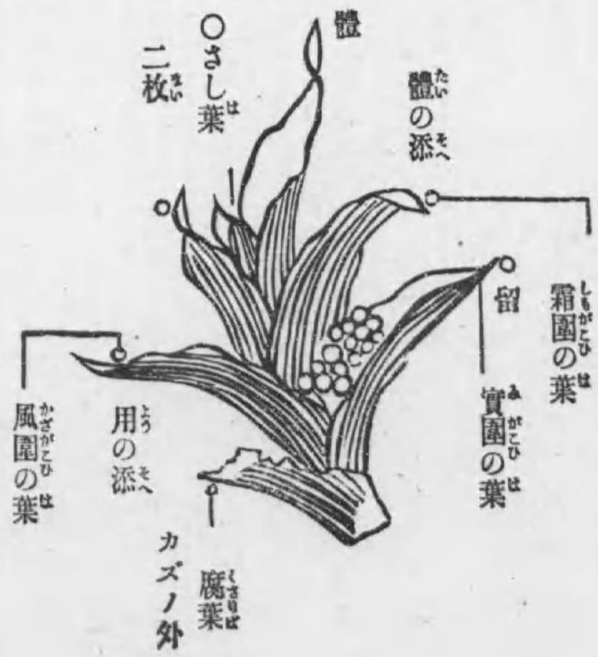
同七枚

葉員多き時は管葉をつかふことあり

凡舊二三月より六月まで餘は用ひず

馬蘭七枚

○萬年青は、葉三枚に實をあしらふときは體の葉を霜がこひにして、用の葉を風がこひとす。留の葉は實がこひにすべし。又、五枚組のときは、體の添葉を霜がこひとし、用の添葉を風がこひとし、留葉は矢張り實がこひとす。尤も萬年青の出生を辨ずれば、二枚陰陽を組んで出で、其うちより又二枚組んで出で、都合七枚とす。是れ萬年青の一體なり。故に八枚目の葉出づれば始めて出でたる葉に蟲が附くか、或は腐るかするものなり。是に依つて七枚を一株として組むべし。七枚組のときは、五枚組の中へ二枚さし葉すべし。下の圖の如し。又、九枚組のとき



萬年青七枚組の圖

は、體の二の添を霜がこひとし、用の添葉を風がこひとし、留は例の如く實がこひとす。實は組葉の外へ挿し入るべし。其餘の數葉も之に准じて葉組すべし。

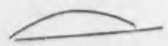
○七五三の組上は、挿方は體一枚、體の添一枚、用一枚、用の添一枚、都合四枚組みて、それより中へ長短に三枚足し葉すべし。小株は三才に組みて、二枚指葉をして、五枚組み上げ、大株の横へ合すべし。小株に霜がこひの葉ある故、體、用の腹へ實を入るゝなり。即ち實の居所は小株の葉の下なり。故に實の上へかゝり葉は霜がこひなり。されば用にも體にも霜がこひの葉あるべし。さて實の前へ幅廣き朽葉を使ひ、此左右へ一枚づゝ添へて、都合三枚にて根本を卷くべし。此三枚は土葉にて實圍と云ふ

萬年青七五三組上の圖

都合組上七五三の數なり。

蘭挿方の圖

○鳳眼



如圖をいふ

○花器は土器か金具の類ひよし

蘭の出生は、一條に葉三枚、或は四枚、又、性よきときは五六枚も出生するものなり。性

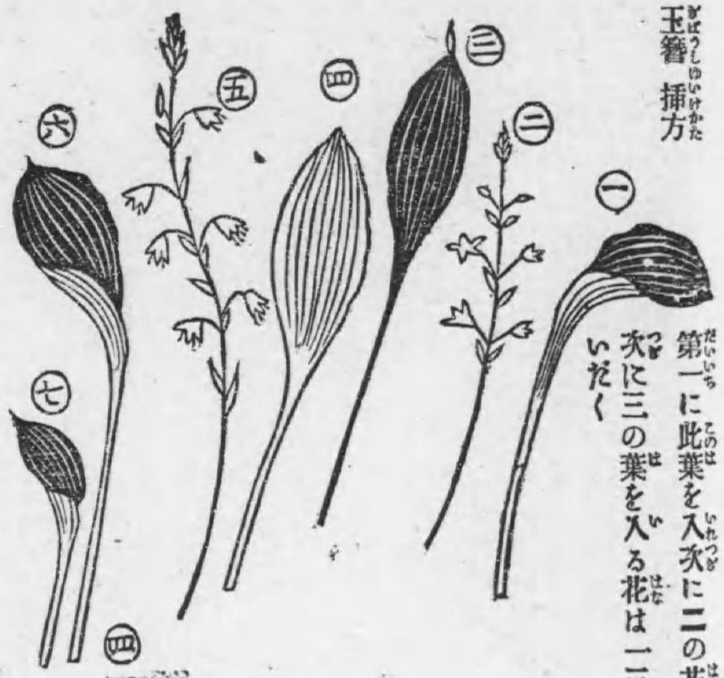
弱きときは葉少しと心得べし。先づ挿方は、用に皮、肉、骨の具はりたるを使ひ、其上に一の添を、用の葉の上に添へ、二の添は直に延べて用の前に使ひ、用の葉を一二の添にて挾み、出生を顯し、鳳眼を具ふるなり。鳳眼と云ふは、上に圓みありて下に圓み無く、牛月の形ちを顯すを云ふ。それより用の花を使ひ、其後ろへ體の葉を使ふ。此葉は篠葉とて、性よく出生せしを用ゆ。次に二の添を使ふ。二の添は體の葉の後ろの撓みたる後ろへ、直なる葉を添へて鳳眼を具ふ。其背へ花一輪にして見え隠れに挿れるなり。留の葉は鳳眼なくして三枚なり。尤も性よき葉をば長短に使ふべし。葉にて天地人の三才を取るなり。花器は土器か金屬の類ひ好し

○玉簪は、花一本に葉三枚、花二本に葉五枚挿るべし。花の旬には花を高く挿るべし。未だ盛ならざるには、花を低く挿るべし。舊四月の初の頃は、花を葉より低く挿るべし。時に隠ひて用捨あるべし。

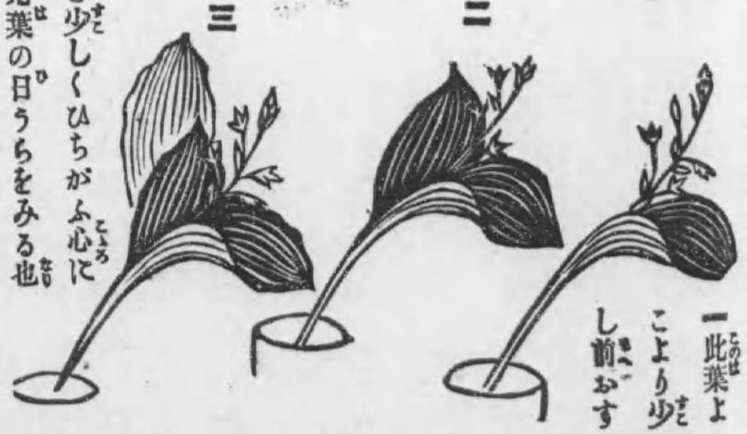
又、流儀によりては花一本に葉二枚、花二本に葉三枚、三本に四枚生るもあり。

未盛挿方

玉簪　挿方



第一に此葉を入次に二の花を入る也
次に三の葉を入る花は一三の葉にていたく



一此葉よりこより少し前おす

次に四の葉を少しくひちがふ心にているべし尤葉の日うらをみる也

次に五の花はしんなり高く入るべし

次に六の葉を入るしんの花は四と六にていだく也

次に七の留葉を入る葉かづ三枚の時は一三の葉を除く花二の花もなし

六此葉少し向へひらきて入るべし

○凡て葉色の薄きは上につかひ濃きを下へつがふべし

○蓮を挿るには、三世の習ひありと云ふことあり。これは蓮の全葉を蟲喰にして下の圖の如くこしらへたるを過去と云ひ、又、性のよき葉を現世と云ひ、卷葉を未來と云ふこれを具へて挿れるを三世の挿方と名づく

然れど、強て此説に泥むべきにあらず。唯養ひを第一にして、挿れるときは池の景色を失はず時候に應ずる處を挿れるを肝要とす。尤も立葉を打ち越して花を高く挿るべからず。葉の下に花を使ふべし。

○蓮を雜せて他の花と共に五種の挿れ方あり。蓮、河骨、燕子花、花澤瀉、葭の五種を一瓶に挿れるなり。花器は廣口馬盥の類の、すべて大なる花器に挿れてよし。尤も花器の正中を深みとし、緣の廻り

ひらきのかゞみ葉をつかふ ○用には半かいの葉をつかふ

卷葉を用ゆ ○葉かず五枚

を淺瀬とすべし。飾石に作意を以て景色を具ふべし。但し飾石を花器の正中に置くべからず。花の生け所は、葭は淺瀬に挿れ、其わきへ花澤瀉を使ふ。又、燕子花は淺瀬に挿るべし。蓮は少し深く挿れ、河骨は葭の所へ挿るべし。すべて深みへ挿れる花は葉を短くし、淺瀬へ挿れる花葉は長くするが自然なり。先づ蓮を廣口の居所へ挿れ、即ち三才の花とす。體には天を寫せし開きの鏡葉を使ひ、用には半開を使ひ、留には卷葉を使ひ、開花を體と用との間へ挿れ、莟は體と留との間へ挿れ、尤も莟は開花より低く挿れてよし。

○次に一寸八分の魚道を分けて、細葉の燕子花を挿れ、花は半開にて一輪、用には三枚葉を使ひ後ろへ半開を挿れ、其後ろへ葉を長短に組み入るべし。即ち横鱗なり。

○客位なれば、右に河骨を燕子花より少し低く挿れるなり。先づ曲ある半開の卷葉を體に挿れ、其後ろへ半開の蓮の花を一輪挿れて、留は角半開の葉を使ふ。

○左の方の前方へ葭三本を竪鱗の格にして七枚、五枚、九枚と挿るべし。葭の根本へは花澤瀉を生け、右の五種とも花形を小締りに挿れ、魚道を一寸二分あけ、花は莟と開きとを雜せて用ゐ留は角葉を使ひ、用には小さき開葉を使ふべし。水際を正しくし、蓮は大葉を使ひ、花形亂れざるやうに挿れるを肝要とす。

又、體の花を長くし、用の葉にて鱗の格を取るべし。留方は砂にて三才の飾石を使ふ。飛石は天一地六の割を以て、程よく水中に景色を具ふべし。

南天燭

馬酔

松に白菊

○子持筒は大小の竹を根がらみにつなぎ長短に切也

有業斎の物好よりはじまるといへり

旅枕がた

朝顔

朝顔は枯枝などにからみて挿べし水ぎはに花一りん必らずあるべし

朽木がた

梅

しんの幹は前へ出で半より枝先うしろへのぞむ體のえだはしんをうけて前に有り

霧島つゝじ

鶴首

射干

菖蒲老人がた

しだれ桃

金鍔花

紺菊

山茶花　錦木　小菊

櫓三重などは時によりては上の一重を休みてもくるしからず水ばかりはりをくべし尤もそのときは二重の生かたにすべし。

剪春花

朽木船

狗子柳は川柳にして又猫柳ともいふ

狗子柳

蒙吾

舟は書院に多くかくる也

屋形舟の花はいたつて入がたし凡舟の作方を専らあらはす樣に花は輕く生べし

屋形船

木蘭

麥

○繋舟

美人艸

舟の正中よりすこしともの方へよせて挿べし片一方のくさりは見切をゆるすといへども兩方へは枝葉のかゝらざるやうあざやかに挿べし

出船

泊船　するもどき

小ぎく　掛り船ともいふ

此下したる枝を俗に梶花といふ

○泊舟は功者ならでは挿がたし花生のうしろ、さがりたる風情に心をつくべし

此枝を俗に綱花と云ふ碇を下すてい也